定山集概

ル 4
3587
3*

門 九
3587
巻 3

昭和十年
二月三日故
小田寿吉氏
長男文太郎
氏寄贈

晃山勝概卷之三

内郭之二

八峰禪頂

八峰禪頂なるものハ古へより當山僧徒の古實として秘する所の行法也初め開山上人當山開闢の時ゟ當りて徒弟と共ゟ出流山より分入り多くの山嶽を攀ぢ無數の嶮岨と躋り難行日を積み艱苦年を累ねて當山開基の功業と成玉へり上人の歿後十餘の徒弟等遥ゟ師の創業を追想し今より師の苦行の跡を踏ミ曽て師の勸請せる神佛へ無上の法施を奉らバ報恩謝德の營ミ之ゟ過べからに且天長地

久の祈り上求下化の修行を末代の法孫に傳へんも亦此大行に超ぐるらんと共に大心发定して年々入峰修行を營む事とい成ぬとそ盖し此行ハ師の跋渉せる巡路を逐て修行そるものと聞つ是ども今三峰の順逆五禪頂の次第入峰出峰の日取等ハ深秘に屬をるが故に詳らかに記そるを得ぬ假に世人の巡拜そる路次に就て靈場勝區の槩畧を掲くるのみ

一之宿　瀧尾の行者堂より乾位に方り三町許阿彌陀が峰の南多寶山の腰にあり神護景雲元年四月十日勝道上人徒弟を引率して二荒の絶頂へ攀登らんと欲そる時此所に草庵を結ひ一七日勤行終て後北の山々へ分登り神社を建立せられしといへり則禪頂口の一の木戸なり

殺生禁断境石　一の宿より北九町許の所に高さ一丈餘幅三尺八九寸巨大なる石標也土人畧語して殺生石或ハ禁断石杯と呼へり旧幕府の頃此石以上に殺生を許されしより猪鹿を獵そる者或ハ諸鳥を捕ふる者多くハ此輿に入を常とそ是より山上ハ都て童山にして萩小笹の類道に横さはり遥に東北を臨めば稲荷川の断岸高く聳そ北岸に凍岩摺子岩

不動岩抔と名附る怪石雄踞して殊に幽情を慰もるに足さり

児墓　禁断石より山上へ登る路傍に有り小なる塔石の上に地蔵一躰を安せり往昔一山中に實道坊と云ふ有り延文元年八月惣禪頂有し時此坊の児住持を慕ひ足に信せ瀧尾の山中に分入り嶮難に觸て死も實道坊の住持児を死を聞き黒髪山の半腹より谷口へ身を投て死さりと傳て此所を實道十ギと唱ふ投と薙と和訓近きを故に後世児を死を憐み山内二三の僧侶呼誤りしならん相議りて墓碑を遺せりと云ふ

八風俗石室と唱ふ　児墓より遥に登れハ岩窟の間に一宇の亭有り四壁を設けて只雨露を凌くのミ禪頂行者未明に此室へ来りて稗粥を炊き之を歃て後巡峰をいへり此所ハ東北に女貌赤薙の嶮山を負ひ東南ハ全く開けて近くハ日光今市の市街を足下に踏み遠くハ筑波加波の双峰より常陸以北の連山を一望もへし実に風景絶佳にして瘦脚の勞るゝを忘る

七瀧　八風より嶮峻を昇降して丈町許行ハ礼拝石の有る所に至る則禪頂行者の拝處なり此所ハ女貌山の半腹にして足下の絶涯ハ削るが如く其深さ幾千

如寶七滝
青東山人

仮とも計り知られぬ佇立して西北を臨めハ懸崖七箇所より飛下る瀑布ハ或ハ長蛇の急流を降るゝ如く或ハ蛟龍の空ゆ躍るゝ如し其長短元より知るべからさるも最長の瀑布ゆ至てハ華嚴瀧抔よりも長きやうゆ思ゑる而して只ゆ七瀧のミならぬ無數の小瀧此所彼所ゆ懸りて勢ひを助るゆ似たり実ゆ壮觀と云べし此瀧ハ則稲荷川の水源ゆして寛文年中霖雨の頃俄ゆ洪水漲り来て下流の人家損害を蒙る者頗る多ゝりしと故ゆや土人等誤り傳て先年山崩れて七瀧現しとりと云とも當山古記を閲るゆ

古へ勝道上人始めて入峰の時より七瀧現在ゑる事を載とり是より箱石金剛まてハ道も定りならぬ急嶮なる小徑の上を濟りて通る所なれハ草鞋滑りて足を失ゑるの患ゆり巡拜者能く心を警めて通過せざる可らぬ

箱石金剛　七瀧より十四五町山上ゆあり則禪頂行者の拜所也巡峯中ふ行者の拜所前後數ケ所あきとゝ之を略せ境界ハ至て狹く只天然石ゆて四方を圍ミ正面ゆ石窟なりて内ゆ深秘の寶物を納むゝとゝ聞けり

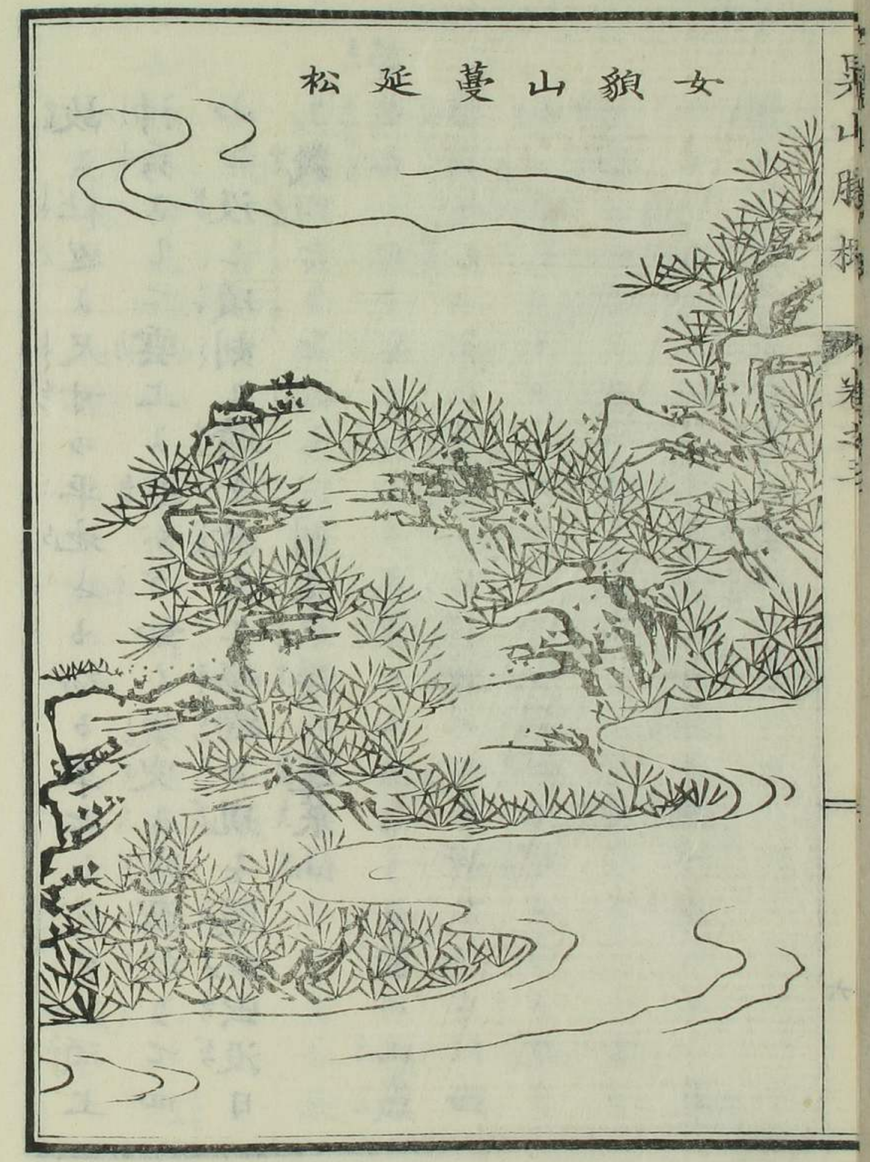
唐澤宿　女貌山の南の半腹ゆ在て一の宿より三里半

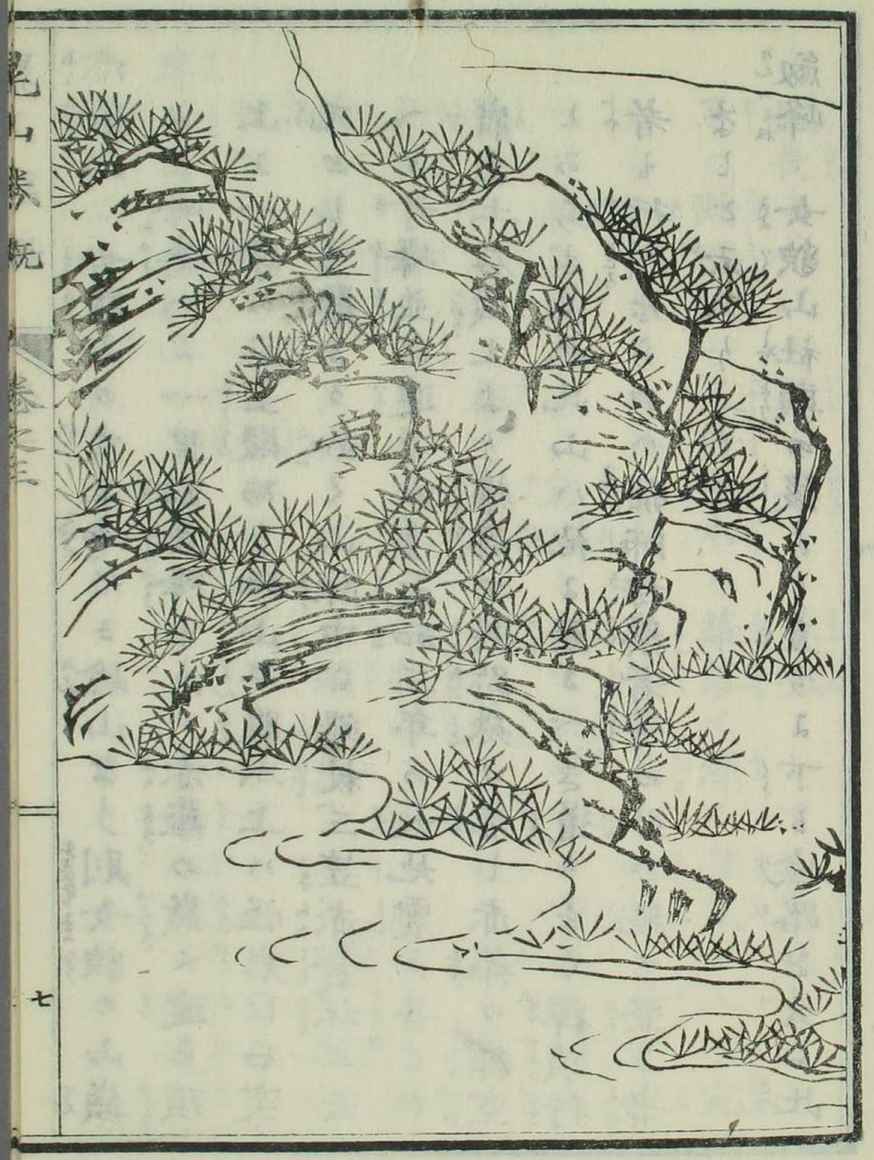
餘と云ふ別ふ家並のあるゝ非に只行者の宿坊一宇あるのみ寒沢宿太多宿皆此類也昔勝道上人の籠居しとる旧跡なるゝ故ゝ八峰行者も爰ふ一宿して護摩法を修し而して後巡拜をといへり都て東山拠ハ飲水ゝ乏しく巡路中一滴の水も求むる事能ハに此所ゝ来りて僅ゝ咽喉を湿をのみ又是より小真子大真子を超て志津と云ふ所ゝ至らされハ飲料水のなる事なし故ゝ巡拜者必に竹筒等へ水を貯へて登山をべし

女貌山神社祭神田心姫命　唐澤の宿より登路八町と云ふ尤も急嶮なり山峰ハ尖り錐の如く其尖頭ゝ社殿とゝ

故ゝ社辺ゝ尺寸の平地ともなる事なし然る共頂上神秀ゝして雲上ゝ遊ぶが如く須臾ゝ雲霧起りて四山を没し項刻ゝ晴を放ちて峰巒を現を隠現出没日ゝ幾回なるを知らに則是東洋の蓬莱仙

蔓延松　姫小松と称をる五葉のものなり女貌の山巓怪岩奇石の上を蔓延して根株のなる所を知らに西南ハ社辺より七八町北ハ一面深谿ゝ望て東ゝ走り赤薙の半腹ゝ至て盡く其長さ一里餘りもなるなるゝし巡拜者ハ此枝葉を渡り根幹を踏て通過をるを常とを實ふ未曽有の長松なり


女貌山蔓延松



赤薙山　女貌山の東より峙てる嶮山なり則女貌の山巔より峰傳へゝ一里餘舞降をれい赤薙の巔に達を頂上に一宇の石室殿あり此山半腹以上ハ怪岩巨石突兀として懸るゝ如く山脉中に錫杖三笠赤倉抔と云へる奇峰並び連なれり天和三年の大地震に甚しく崩壊土石頂上より薙落て其跡殊に赤し赤薙の称空しからざる也此山ハ他に登るべき道もなく禅頂行者も行所ならねハ獵師採藥者等の外ハ絶て登る者なしと云へり

劔峰　女貌山社頭の後より直ちに下る嶮路を云ふ此

嶮長あらにと岳も甚しき急嶮にして三角状をなし足の踏所僅一尺許左右ハ薙落て深く澗底に入り宛あら劔を渡るゝ異ならに巡峰中尤も危嶮の所と云へし故に頂上より鐵鎖を垂て巡拜者の不虞に備ふ是より前路ハ都て馬脊の如く或ハ松枝を踏ミ或ハ危岩を攀ぢ辛ふして專女帝釈等に達を然れとも風景の秀靈なるに至りていい舌頭の能く尽を所に非に恍として仙道を歩るの思ひをなせり

專女山　女貌山の西に連なる一奇峰也前の嶮道を渉りて爰に至れい高さ六七尺許なる直立をる大石

なり尋常なして攀る事能ハに故ゑ鎖を取り身を躍ら
せて登る様ゑ成置り此峰頭ハ峻岩奇石縱横ゑ聳
えて逕路も定まらに或ハ石の間を過或ハ岩角を傳
へて帝釈山ゑ至る

帝釈山　専女山の西ゑ峙てる高山ゑして太郎嶽と相
對も頂上ゑ一宇の石宝殿あり此後より西北を望め
ハ會津越後の諸山連亘して波濤の如く栗山郷の村
落ハ眼下ゑ散布し風景亦他ゑ異なる所あり此山巔
より一里餘降るハ馬立ゑ至る

馬立　此所ハ帝釈と小真子の間ゑして日光市中より
栗山郷への通路なり則両所より荷物を運輸もる者
此所ゑて馬を継替ると云へり巡拜者ハこゝゑ降り
ゑむし休足して更ゑ登山も

小真子山　馬立より登攀十八九町頂上ゑ一宇の石宝
殿あるのみ此山高からにと虽も昇降共ゑ急嶮なり
昔勝道上人八峰の時地蔵菩薩を勸請して小真子大
明神と称せりと云ふ

鷹巣　小真子と大真子の間なり平常ハ人の通行もる
所ゑあらに年々八月登拜の節ゑ當るハ近村の者茶
榻を設けて遊客と待と云ふ

大真子山　鷹巣より登路一里許攀易きを覺ゆ頂上ゑ御嶽山の社殿あり其傍なる小高き石の上ゑ神人束帯の銅像を安む俗日野權現と云ふ此他山腹ゑ一躰八戒山神山麓ゑ一躰三笠山神共ゑ銅像ゑして其高き五尺許文久三年真誠講社の建設ゑ係る此山巔廣うらにと虽も岩石甚奇異ゑして矮樹容を為し殆と人工りと怪まる是より降りハ則此山の表口なり

千鳥返　大真子の表坂八九合目の所ゑあり此所ハ両傍の山脚崩き薙て深く谷間ゑ入り只一角危岩怪石の聳えとる上と通過むこと故ゑ他と顧る事能ハに岩石將ゑ落ゝんとして道の絶る所ゑ至まハ鎖鎖を垂き鐵階子を設けて僅ゑ單行せし也此前後一町半許の所ゑ鐵階子四脚を設けより其嶮惡なる押て知るべし相傳ふ往時千鳥飛来り此嶮と超る事能ハに して退きしと云ふ此所を通り過れハ坂路急峻なる恐怖をる程ゑハあらに御嶽講と称そる者ハ斯る危嶮をル恐きに年々登山して冥福を祈まりと其熱心ル亦恐るべし

志津　大真子と男躰山の間ゑして日光町より中禪寺温泉への通路也又湯殿山への本道とも此宿ハ往昔

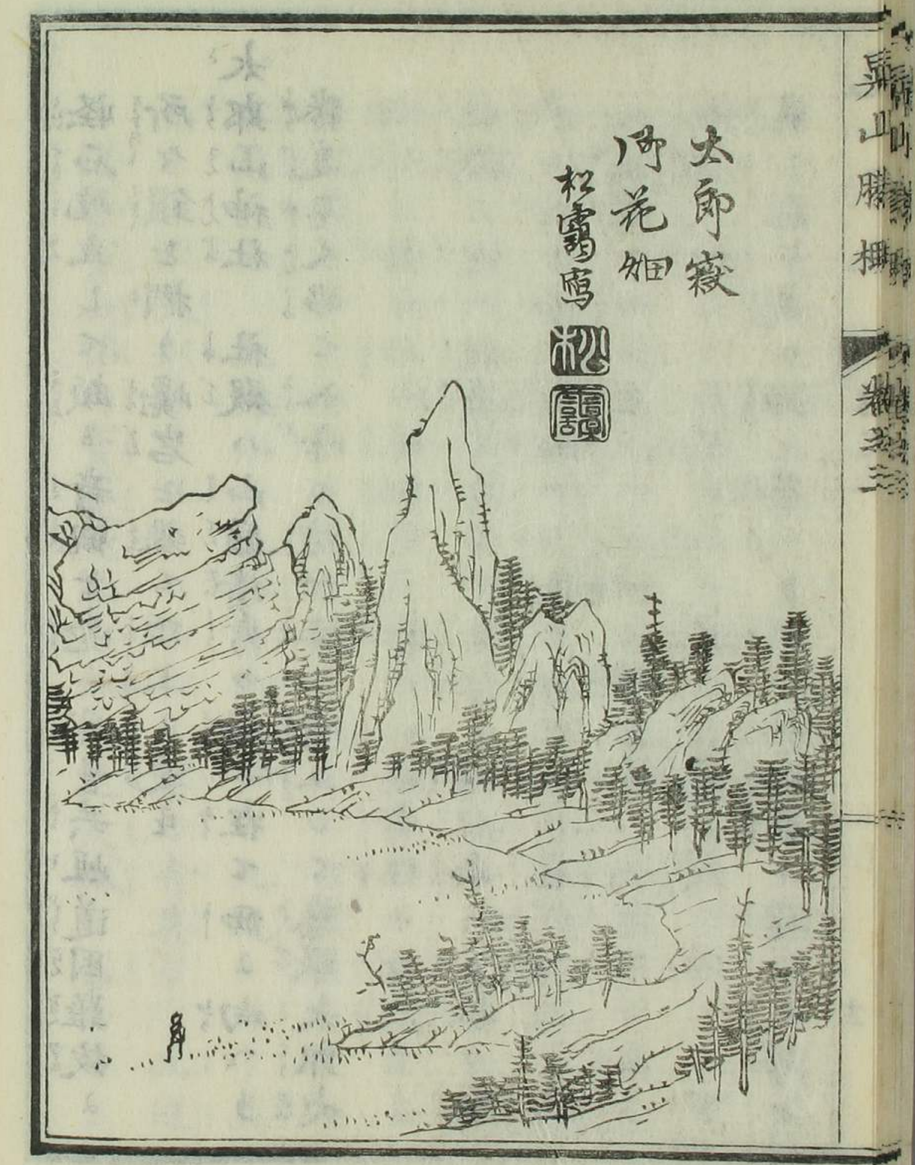
勝道上人入峰の時蝎庵を結ひて修法せら巡とる旧跡なり爾来入峰行者の籠居もる処場と為り上故ゑ建家ハ五六棟ハり水ハ亦乏しからに終日女貌の高峰より所々の嶮難を跋渉し足倦み躰勞るゝ及て此所ゑ草鞋を脱を生バ初て蘇生の思ひを為せり神佛ゑ奉仕もる者職として注意の厚きを知る是より男躰山の裏道を登り御真佛を経て中宮祠へ降る巡路ハ所を上とも男躰山の事ハ前条ゑ記しと巡い道を轉して太郎山の勝概を筆をへし

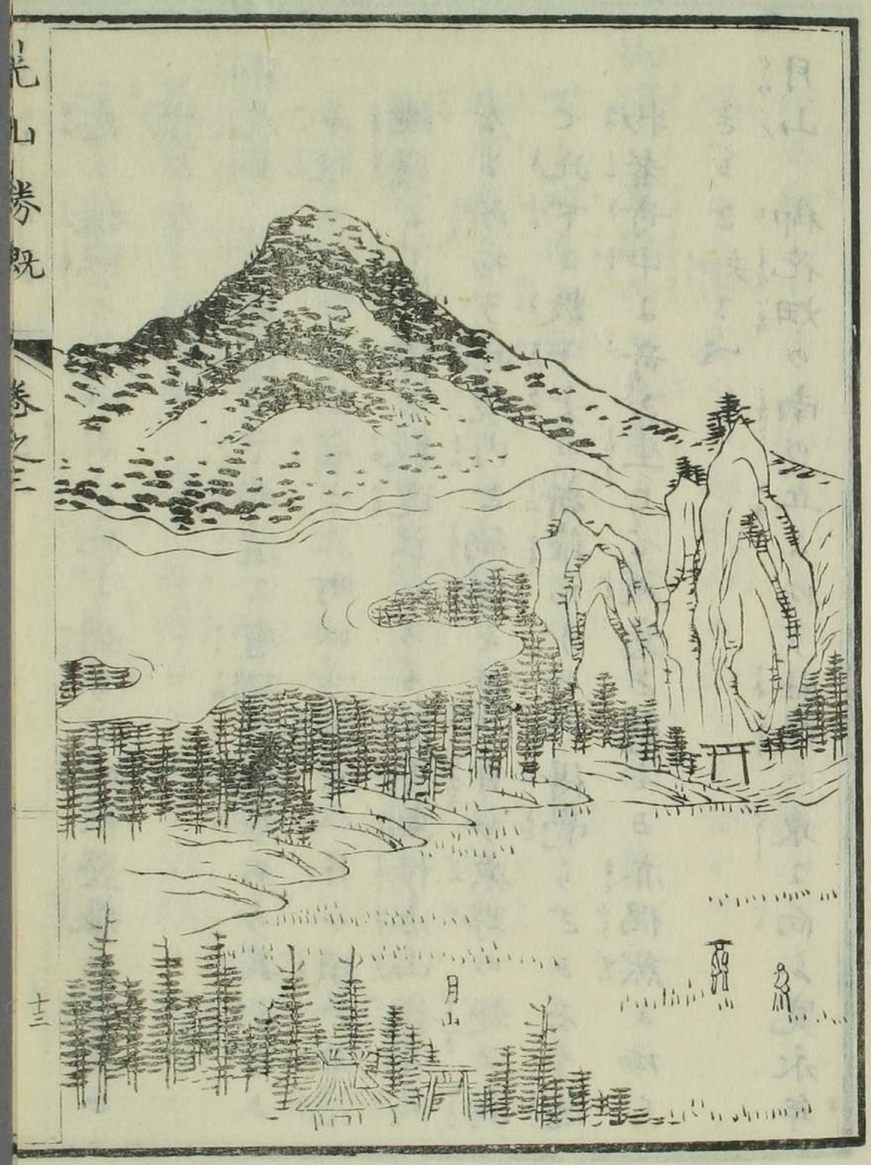
老婆閣土俗御婆様と称も　志津より西の方十八九町去て道の左ゑ所り異形の石像なり覆屋ゑ老婆閣の額を掲く由来を詳らかみせに土人等頭巾腹掛等を寄納して小児の息災を祈ると云ふ

太郎山新羅　神橋より太郎山の麓迄四里餘麓より頂上迄一里半と云ふ此羅い山の八九合目より麓まで羅落て其高き幾千丈なるを知らに通路ハ此羅の中腹ゑ沿りて斜面なる一枚石と横切て通る所なきハ其危嶮なる人をして心膽を寒からしむ若歩を過て忽ち陷りて澗底の幽鬼となるや言を待さるなり故ゑ能く心を警め岩石の方へ身を寄せ徐々と通過

をへし是より頂上迄ハ尤も急嶮よして岩角と傳へ
木根よ縋りて梵天石の下辺よ達を
編者云日光裏山ハ所として峻嶮ならざるハなし
就中女貌山の紗峰大真子山の千鳥返太郎山の新
難と以て三大難所とを然るとも到る所風景絶妙
よして云ふべからざる者ハ故よ曰く此裏山を
巡覧せさる者ハ日光の勝を説こと勿れと
一本梵天石　太郎山の九合目御花畑の北辺よ有り其
高き五六丈形ちサボテンふ似て甚さ奇異なり此辺
よ護摩壇石胎内寶蔓陀羅石三本梵天杯と名つくる

怪石屹立して頗を奇觀を覺ふ然るに共岨道困難故よ
所々鎖を捫り嶢岩を攀て頂上よ達を
太郎山神社　社殿ハ山巔清秀の所よ在て西よ向へり
勝道上人始て入峰の時一社を建立して慈眼太郎大
明神と號を乃ち味耜高彦根命垂迹常住の靈蹤なり
社殿の辺ハ稍廣くして四方全く開け南ハ男躰の緑
翠と掬し西ハ白根の白雪と踏ミ北ハ岩代越後の諸
山煙霧の中よ出没を山脚の煙を見て村落有を知り
水聲の微なるを聞て山の高きを覺ふ或ハ俯して下
界を窺ひ或ハ仰て蒼天を望む勞脚頓よ癒て又帰を


太郎嶽
阿花畑
松嶺寫


月山

忘る探勝の人一さび此よ到らハ必ず登攀の遲きを
恨むなるべし

御花畑　太郎山の下向道よ唐銅の鳥居あり其南なる
平坦の所を云ふ廣さ三町四方許七八月の頃ハ草花
爛漫として鑪を敷連ねさるゝ如く幽情亦山嶽と異
なる所ゆり此境内を徜徉を望ハ自ら原野の趣を具
て此下よ數千丈の新薙ゆりとハ得覺らざるなり造
物者奇中よ奇を生して人意を慰るも亦偶然よゆら
さるを知るべし

月山　御花畑の南の丘よゆり社頭ハ東よ向ふ寛永年

中湯殿山と共よ勸請せる所也爾来此山を月山とも
唱へさる由委くハ湯殿山の条を見合るべし

御潭　男躰山の北裏より發し太郎嶽の麓を經て西へ
下る河原を云ふ平常ハ一綫の水も流るゝことなし
此河原の石上を渡りて暫し下ればハ其幅或ハ四五間
或ハ六七間十五六町の間両岸の絶壁ハ屏風を建と
る如く其高さ三四丈より五六丈よ至る上よ樹木生
茂りて更よ日輝を見ざる所あり此地の風致ハ他よ
異なり自ら陰氣を含み苔滑らゝみして殆と幽冥を
辿るの思ひを為せり嗚呼晃山の絶勝朝ゆハ高嶽よ

登て天門を敲き夕よハ深溪ゟ入て黄泉を窺ふ其奇
其妙と集蒐して漏も所なし何も世の美を一方ゟ擅
ゟ也る小仙窟と同日ゟ語るべ者ん乎

湯殿山　神橋より四里半地名を舟沢と云ふ則御澤の
行詰りゟて北岸より僅の小瀧流出也之を梵字川と
唱ふ此水他へ流るゝ事なく其所ゟ湛て潮を為せり
故ゟ瀧の割合よりハ潭底の深きを覺ゆ湯殿山ハ瀧
の二二町與ゟ勸請しハ弘也も參拜者ハ社頭迄至る
を得ズ小瀧の辺ゟて遥拜也を例と也是ゟ沢ゟ
沿ふて下ゟい砂搬と云ふ所ハり參拜者ハ此所ゟて

草鞋をもき替各々下山也る事なり是ハ靈場の土砂
を他方へ移さゞる旨趣なりと云ふ

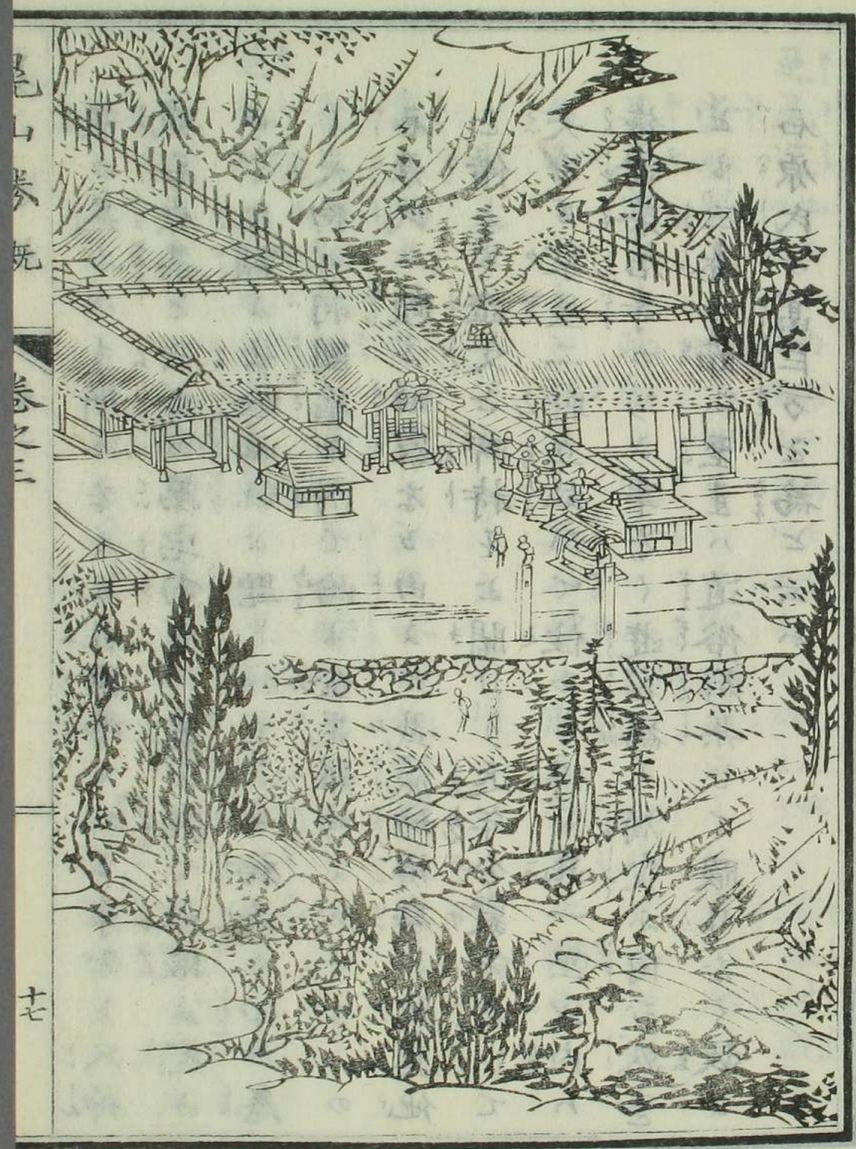
旧記ゟ寛永元年五月羽州より湯殿山權現を勸請し
竹の神輿ゟ白幣を以て之を飾り村々宿次ゟて生岡
大日堂ゟ送り来る時ゟ東照宮別當行恵生岡ゟ詣し
て白幣神輿と當星宮の拜殿ゟ移也十一月十五日更
ゟ寂光の拜殿ゟ移也翌年三月中旬天海大僧正の命
を受け一坊十餘人弟子同宿と行卒して綱子沢の水
上ゟ分入り太郎嶽の南舟沢と云所を湯殿山と見立
太郎嶽の中腹を月山と見立男躰山北の半腹を御真

佛土見立裏見の瀧を荒沢と見立更ゑ大僧正の命を
待て同年四月八日右四箇所ゑ勸請を云云

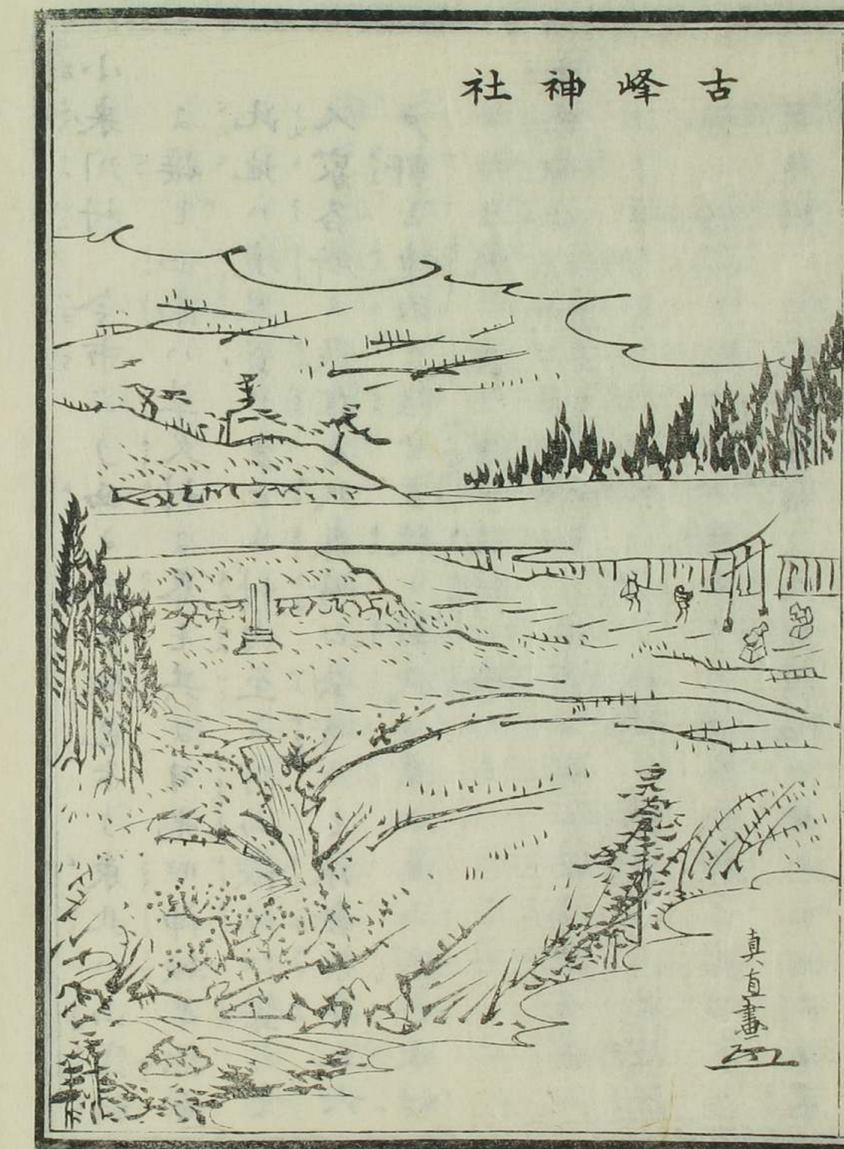
外郭

今市驛　上都賀郡ゑ屬を宇都宮より行程七里草高七
百石餘町名七（小倉町。住吉町。春日町。相生町。旭町。河原町。大谷向）惣家數三百八
九十戸此地ハ日光咽喉の要所ゑして晃山近傍ハ勿
論足尾栗山の諸村ゑ至る迄米塩悉く此地より仰ら
ざるを得ス且晃山へ詣る者ゑ上州花輪の一方を除
くの外ハ都て此地ゑ出ざるを得ス故ゑ人民常ゑ輻
湊して一の小都會を成せり

小来川村　今市より西ゑ方る僻邑なり東北ハ山窪村
ゑ接し西南ハ草久村ゑ界を共ゑ日光旧神領と称を
此地ハ境界廣け並とゑ村内至る所山嶽並び聳えて
人家各所ゑ散在を只森崎と云所のミ旅舍茶亭五六
戸軒を連ねて住せり故ゑ村民の業とを所ハ木材
を作り或ハ蠶を養て生計を營めり
古峰神社（祭神日本武尊旧金剛童子と称を）　小来川村の西南草久村ゑ
ハり小名を古峰ヶ原と称を相傳て勝道上人晃嶺跋
渉の際錫を留めし旧跡なりと云ふ此所ハ鹿沼より
足尾村への通路ゑ當り山間狹隘の地ゑして別ゑ風



古峰神社



景の見るべき所もなく且社殿等もなかる事なし只神職石原某と云者の第宅内に一畫を設て社殿に充るのこ扁額に古峰神社と題しなども物品の印ハ悉く天狗の羽團扇を附て恰も金毘羅神に似さりこの石原氏ハ頗る旧家なる由にて武蔵坊辯慶ゟ粟其他を借さる證文を所持をと聞けり近年分家を設けて大なる家屋二軒立並びて住めり併し此一里以内ハ旅舍茶店等の有る事なく遊客為に酒食に困む然ども三春の節に至ハ道俗群集して暇日なく故に石原氏の富巨万を為と云ふ

足尾道（此所い内郭に屬も足尾郷の要路に當るを以て爰に記せり）　清瀧村觀音堂の脇より右へ曲ハ中宮祠道にして左へ向へハ足尾道なり此所に追分の石標有り右中ぜんじ道左あ志をうちと記せり其石標の脇に俳句を鐫も

青葉こゆ一宋にて大谷川　李喬

裏に元文庚申初夏　江戸本所紀伊國屋立之とあり

是より細尾村を過て足尾峠にのゝる

足尾峠　細尾村より登り一里餘日光鉢石町より嶺上まて三里と云ふ絶頂に茶店一戸常住して飲食宿泊共に差支ふる事なし是より西南ハ則足尾郷にして

降り一里許麓の小名を渡瀬と云ふ此谷川ハ中宮祠湖水の南なる渡瀬といへる溪間より流出るゞ故ふ下流も亦渡瀬と唱へ環流して利根川ふ入もの是なり此麓の谷川を踰て二里許行ハ足尾村赤沢及ふ新梨子至る則日光町と足尾村との中間ふ位る峠なり又比嶺上ふ二條の間道あり一ハ日光道の北より別ま一里半餘行ハ中宮祠へ至る上州より詣る者ハ皆此道を通行る一ハ茶屋の西より南へ下ま バ古峰ふ原へ出つ是冬峰行者の通路なり此峠ハ小鳥の名産ふして秋冬の節ふ至れハ峰の両傍へ二間四方許なる

網ふ數百張連ね張りて鶫を捕ふ之を鳥屋と唱ふ他の小鳥ふ比る色ハ其味殊ふ美なり

足尾郷　足尾峠より上州境迄の惣称ふして南北八里東西七里許草高六百石元籍二百七十三戸此郷ハ元上下十四箇村ふ分ちなりしを明治維新以来悉く合併して單ふ足尾村と称せり此内眼目とる所を撰水赤沢新梨子の三所とる共ふ相接して家屋百戸許警を連ね郵便局あり警察所あり旅舎茶店等ふ五六戸なりて山間ふ似ぬ盛なる地なり故ふ方俗此所を宿と唱ふ世俗足尾村と云ふハ都て此三所を指なり此宿より三條の通路

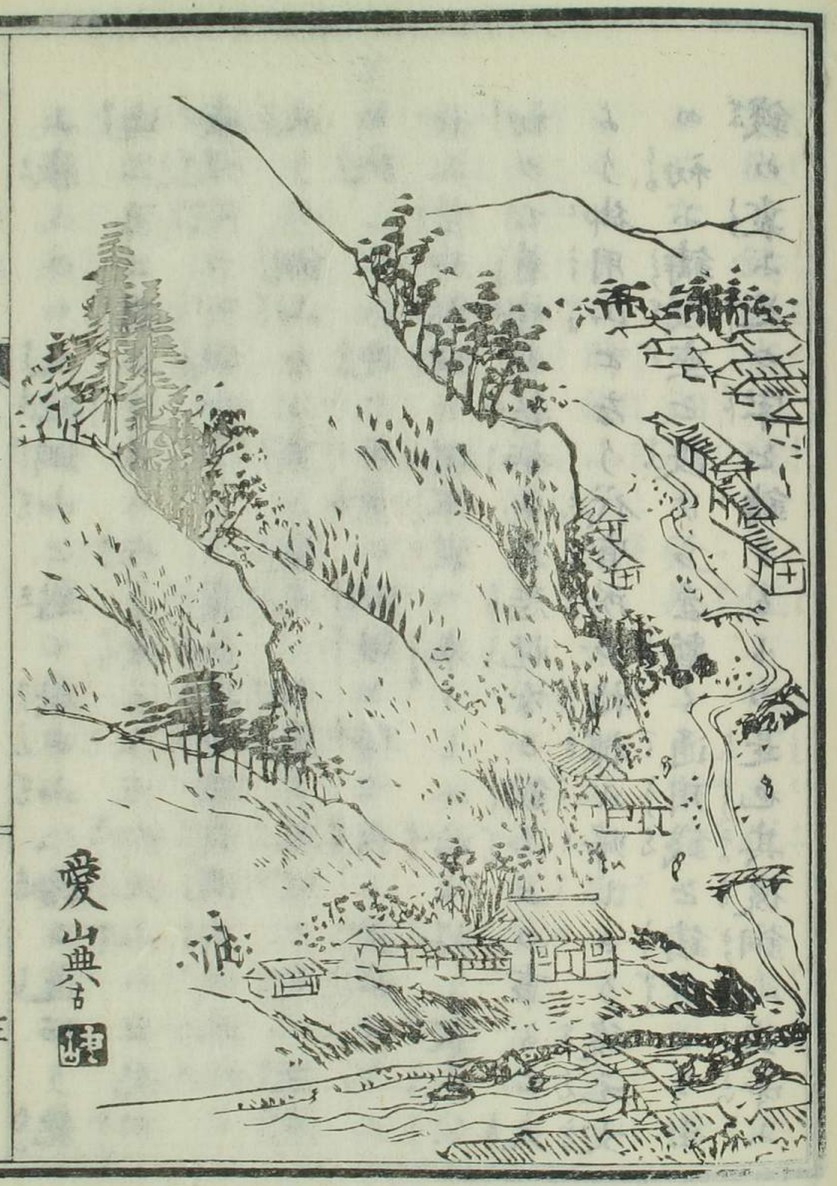
なり東の一路ハ日光へ六里西ハ上州花輪へ六里南ハ鹿沼へ九里なり何れも登路一里餘の峠なれども西上州口ハ既ゑ開鑿して人車も通行すと聞く南鹿沼口ハ坂路泥濘なるも道幅廣くして危嶮の事なく後を顧ミれハ右ゑ庫申山脈の翠嵐と掬し左ゑ冨嶽の白雪と望ミ風景絶佳ゑして勞を忘るゝゑ似たり只東日光口のミ却て嶮難を覺ふ此地中古銀山銅山の盛大なる項ハ足尾千軒と唱へ諸國より來集する者も多く頗る繁昌を極めしゆ延享寛延の末より漸く衰へ家數も次第ゑ減して三百前後とハなれりと

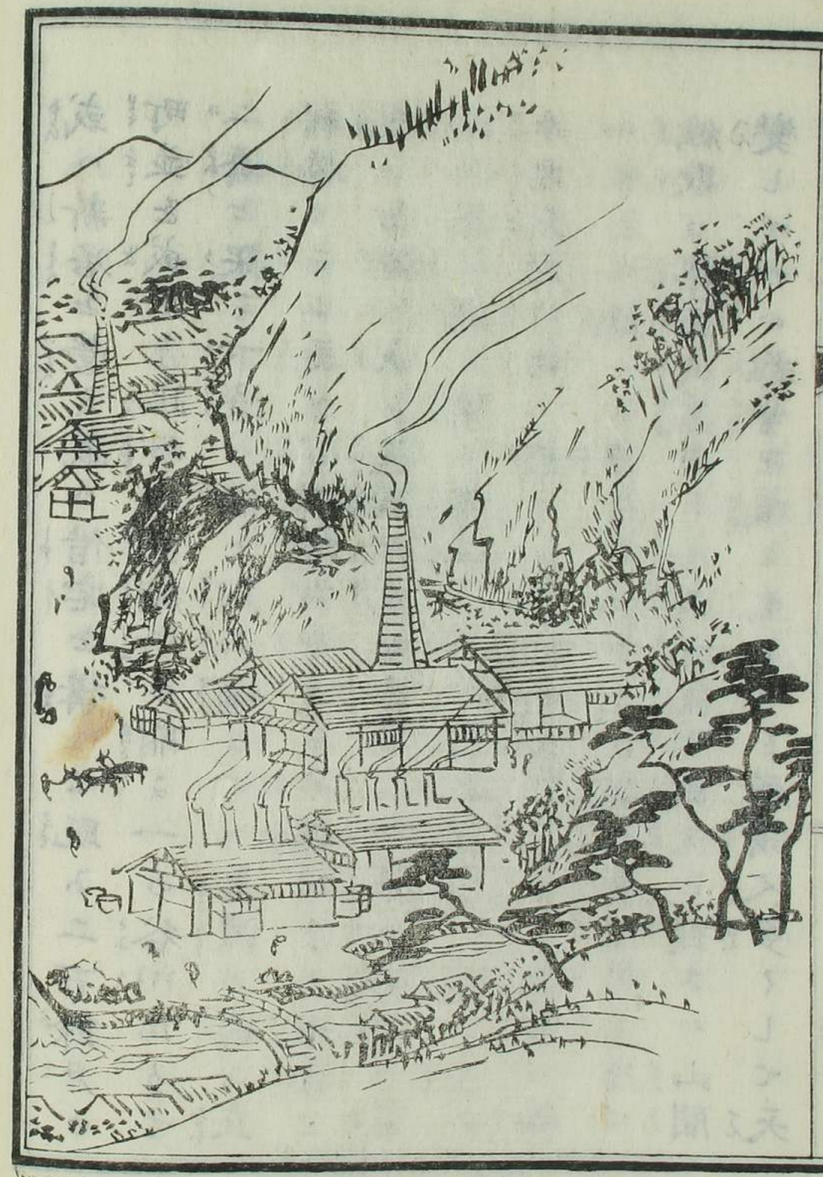
近來又多量の銅鑛を堀出せるより更ゑ勢ひを取直して人跡の繁きゑ至る故ゑや今般官許を得て貸座敷二十戸程取立る事ゑ決せりと盛なりと云ふべし然れとも物ゑ定數あり事ゑ變更あり昨日の盛大ハ今日の衰微と變化するも亦知るべからず斯の如く銅穴と盛衰を共ゑするゆ地ゑ在てハ只時勢ゑのミ走らに少しく省慮して後來を企圖するを上策のやうゑも思へる併し八らぬお世話ゝ

銅山　足尾宿より一里許東北ゑあり銅山ハ大抵足尾郷の中央ゑ位して周廻五六里ゑ亘り樹木生せに只

焼石の如くなる岩石のみ累々と皮相を為せり新旧の坑穴無慮百餘數所を採掘せるもの僅か二三より過ぎず此山は方今東京府平民古川某の拝借地なりて近頃潤益殊に多しと云ふ故に廣大なる製銅所を二箇所に建設し焙焼爐の硫煙常に四山を覆ふ支配人以下銅製に役事せる者千有餘人坑夫七千餘人を使役せと聞けり此坑夫の屯所は大なる粗屋を作りい組飯場ろ組飯場といろは別の標札を掲けて組々を分ち其數幾十なるを知らに之に於て其機に投して利を細せんと欲せる者西より東より日に来集し

或は新居を營み或は借宅を構へて既に二百餘戸の町並を成せり此町と製銅所の間に一の谷川ありて二橋を架せ下流の橋を銅山橋といへ上流の橋を直利橋と云ふ長さ百間許市中に一橋ありて新橋と唱ふ市街は未だ狹隘粗屋なれど旅舎酒店は殊に多く物小間物類を鬻く商店もあり牛肉鳥肉魚肉の類より干物漬物に至る迄飲食の料一として欠さる事なし加ふに出稼の藝妓數名有て絃歌の聲昼夜囂しし此銅坑益々盛大を致さは山間變して一の都會を成に至るべし所謂人多くして天


愛山典古



み滝ものゝ又此銅山を越て庚申山へ詣る道ゆゝ麓
迄二里と唱ふ登ること歩ゝ安らに抑此山ハ日光旧
座禅院の所領なりしゝ慶長年中備前國某氏此地ゝ
来りて銅山なる事を發見し同院の允可を受て採掘
を試ましふ追々多量の銅鑛を得て大ふ貨殖せりと
云ふ當時製銅を將軍家へ奉りしふ恰ゝ好し家光公
初めて着袴の折柄ゆゑ恐悦なる銅山上の事ゝて夫
より御用山となり代官所の指揮ゝ帰しより後元文
の初ふ鑄錢座を設けら登暫く通用錢を鑄造せる由
錢の裏ふ足の字を鑄とるゝの是也其後銅山次第ふ

衰微し鑄錢座ゝ廃されて僅ふ代官手代のみ在住しけ
るとなん初め銅山を發見しとる備前の人本國ふ帰
らんとせし時銅山開闢の来由を石ゝ勒して新梨子
村大圓寺境内ゝ建置けるゝ今ハ寺ゝ荒蕪し石碑ゝ
毀損して基石のみ存せるのみ

庚申山　足尾郷北方の山與ゝなり日光より九里半と
云ふ其道筋ハ足尾宿より上州街道を五六町行ハ路
傍ゝ一基の鳥居なり其左ふ庚申山と鐫とる大なる
自然石を建てり高さ一丈二三尺ゝならん又其右ふ
庚申山表口と栗せる小なる角石なり此鳥居より庚

申山の麓迄一百十四町一町目毎ゑ石標を建て、參詣者の先導ゑ供ゑ皆東京講中の建設そる所なり茅一町目より十二三町の坂路を登り更ゑ十町許下き い銀山平と云所ゑ至る則昔年銀鑛を採堀せし所也夫より六十三町目迄い溪水ゑ沿て漸々ゑ登る道なき い別ゑ危嶮の所ゑなる事なし六十三町目より數十町の間ハ急嶮なる山の中腹を昇降そる所なきハ能く心を警めて通過せざるべからに八十五六町目以上ハ始終登り登りて山麓ゑ達き麓の東寄ゑ別當の坊あり喫飯投宿共ゑ逆客の需ゑ應き此坊より奥

院迄一里餘町と云ふ先つ坊の庭前ゑ佇立して全山を仰き望めハ概圖ゑ示せる如く其形勢恰ル一物を兩断しとる半面ゑ異ならに其絶壁空際ゑ峙ちて雲師兩師交々相朝き案きるゑ上世天地變動の事なり此山破裂して半山ハ谿谷ゑ埋没せしならん故ゑ天工の奇石平面ゑ懸りて人目を驚りせり偖探勝の順序ハ坊の西より僅ゑ登き ハ百間幕と名附る岩石面里高さ數百仞長さ百間のミならに其詰りゑ目洗藥師と云なり清水常ゑ滴りて小潭を為き夫より數百歩の所ゑ茸ゑ似とる石なり其先なる路傍ゑ峙つル

のを櫓石と称せ方形の大石なして高き数十丈頂上
み叢樹生茂りて真ま櫓ま似さり仰て奇と呼ぎるハ
なし更み歩を進むまハ裏見の瀧み至る飛泉の高さ
八九丈幅六七尺水勢小なまとも奇觀なり裏面の岩
窟ハ廣く數人圍欒して宴を開くべし更み登まハ女
躰石と云ひり數丈の大石両傍より密着して藥研の
如く上み一竅あり前み三角状の石差出てゝ穴の半
を覆ふ女躰と名附るも亦可笑し是より西ま岩石相
連りて五彩を為ものを五色岩と唱ふ其上なる一塊
を不動岩と称せ側面より見まハ不動の頭まもやゝ

似さり爰ま過まハ巨岩の上み三個の活石蹲踞せ之
を三猴石と名附く其さま思ひなしみや視る事勿まま
聽く事勿まま言ふ事勿まの三の箴とも見ゆ其先み又
烏帽子ま似さる石あり此左なる岨道を傳へ登まハ
梵天石の下ま至る此石路傍より峙ちて高き七八丈
勢ひ凌く可あらば先年一人の行者ありり危嶮をも恐
れず攀登りて頂上へ梵天を納めしと云ふ此前後み
鎧石童子石面石杯と呼べるものハまども見るみ足
らず更ま進めハ五重塔と唱ふる石有段々階級を為
て其名ま背ふず此北ま並へる二柱石ハ則一の門也

高き六七丈両柱の間ハ九尺許地上より六七尺上ゟ大石横さいりて自ら関門の趣を成を亦奇と云べし其中央ゟ四尺許の活石蹲まりて人を迎ふるの面影なり一の門を通り過て右ゟ向へハ谿間より數丈の岩石峙立を梵字石と名附く髣髴と梵字の形を現を此所より奥院ゟ達を逕路ハ至る所崎嶇として鍊梯二脚鍊鎖二十四箇所あり其嶮難なる押て知るべし梵字石より西へ登を冨士見岩と云なり此岩ハ山上より斗出を事八九尺其下ゟ立て南方を望めハ冨嶽雲上ゟ峙ちて白雪皚々とり此近傍ゟ燈篭石、

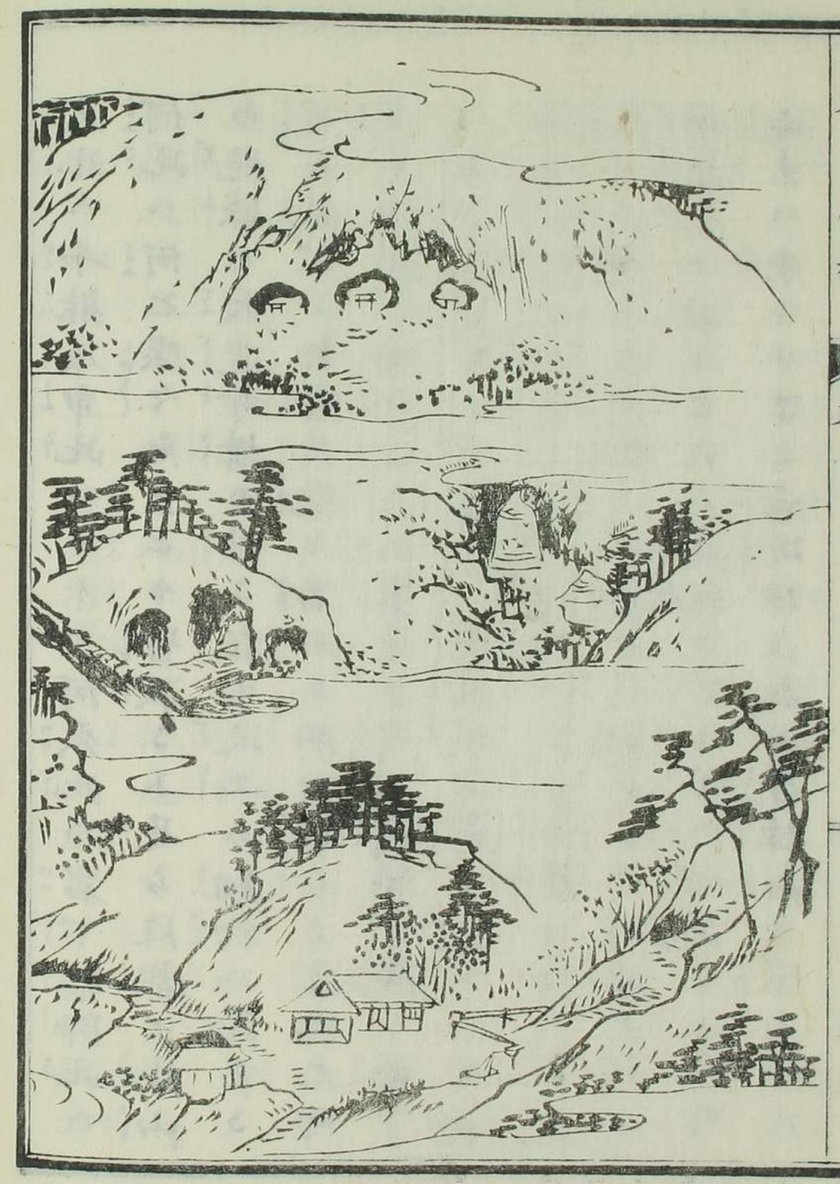
螺石、蠟燭石、燭臺石、拝と唱ふる石なを上ル面白のなり此所ハ巡覧所の西極なを上ハ是より方向を轉し東ゟ向て胎内竇りゟ至る初めハ小胎内穴の大さ僅ふ三四尺故ゟ匍匐して竇り出つ次ハ大胎内其廣さ六尺許直立して通ゟと得此胎内を竇り抜を上ハ三四町の下りなり是より先ハ或ハ降り或ハ昇りて奥院ゟ達を先つ降りて東ゟ進めハ獅子石蛙石、拝といへる尋常の石なり更ゟ進めハ猿沢と云所ゟ至る此沢ハ一滴の水ルならざ至ど切石を疊みさるが如く遥ゟ山上より下りて無水の瀧ゟ異ならに亦一奇絶也

昔此所ハ白猿の住めるゆゑ故ハ猿沢と唱ふるとゝやゝ又
降るゝ所ハ座禅石象石酸漿石宝蔵石抔と呼べる
ルのゆゑとル取るゆ足らに爰と過て二の門手前ハ
至ゑハ断岩危石の嶮ゆなく風景妙絶ゆして心廣く
躰寛ゆなり此二の門の構ハ梯形の大石ゆて長き
三四十間厚さ僅ゆ七八尺中函ハ二間許左右の窓い
各々七八尺天工の妙云ふかりなし此門を實れハ更
ゆ嶮悪なり當前の絶壁ゆ三間餘の鐵梯を架せ之を
登りて突元とる危岩を踏て鎖を押りて僅ゆ下ゑい
二間餘の木橋を架せり此所を岩切沢と云ふ實ゆ名

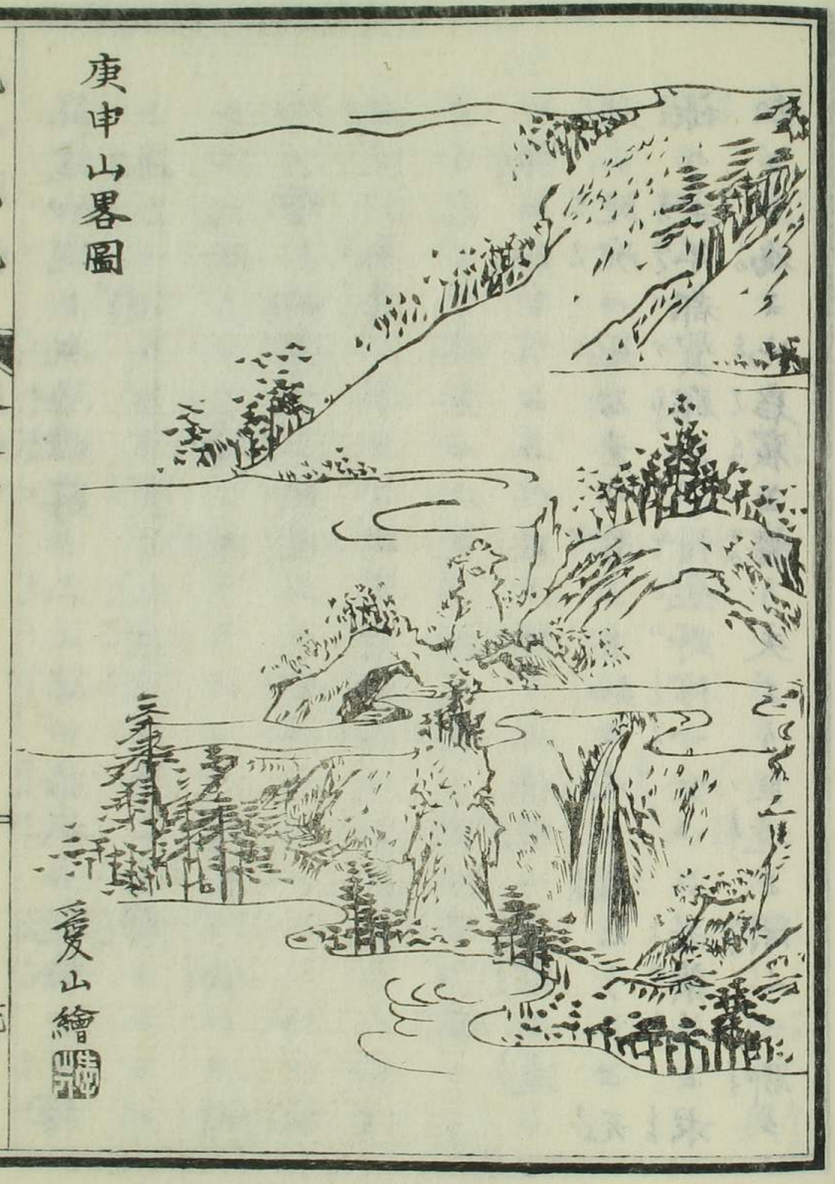
称の如く両岸の岩石削劃して潭底窺ふべからに昔
此沢ゆ天然の石橋ありしゆ山上より大石崩ゑ落て
石橋ル共ゆ幽谷ハ陥没せりと云ふ爰を去て北ゆ向
ハい鬼の髯磐といへる難所あり此岩石の高さ三四
間其岩の切目ハ僅ゆ二尺許急斜を為ル其間なる鐵
鎖ゆ携をり辛ふして登攀ル此岩上の右方ゆ猿田彦
命を祀ゑる小祠あり之を當山の本社と唱ふ其南の
崎を見晴しと称ル起て四方を眺むゑハ全山の風景
座ながらゆして盡ルべし思ひを殘して東ゆ向ハバ
屏風を折とる如くなるゑ屏風岩と名附け又岩石の

層々とるを女浪男浪と呼ふ此浪石を廻るい岩ふ沿て危ぶむべかりの桟道を渡せり此所ふい命を繋く鎖はてゝなく其下を見下せい溪間より雲を生して深き事幾千仞とゝ計り知らまゝ探勝中の難所と云むゝ桟の詰りふ釜石と云ひり其側を過るい正面なるい鐘石なり蘿生し鬼糸生ひて真ふ庫鐘ふ異なられ其右ふひるふ亀石左なるい鶴石なり鶴石より滴る水を金光水と名附く下ふ銅盤を据て水を貯ふ巡覧人い此水ふ咽を濕し暫く休息して奥院ふ詣る事なり此所ふ至る迄案内者詣人ふ示して此い辨才

天此ハ千躰庫申此ハサイの河原此ハ岩下藥師此ハ何此ハ何と喋々也ましゝ皆取るふ足られ都て此山の絶勝ハ天造奇構の妙ふ在て人工の細物ハ論ぜる所ふ非ざる也偖奥院と唱ふる所ハ鐘石より八九町上ふ登りて嶙々とる三窟なり前ふ錢掃を設く登りて窟中を窺ふふ中なるハ楕圓状をなし廣き五六間青面金剛を祀ましゝと右ハ圓るふして是も五六間大黒天と崇む左ハ前の二窟ふり小ふして二画を為ぜ辨才天を鎮ましゝと云ふ奥院と下りて下向道を五六町辿ましゝ東のつまと云所ゝり左ふ男躰山と望ミ右ハ



庚申山畧圖



筑波加波の双峰煙霧の上ゝ浮び房總の遠海ハ夕暉を涵して明らかなり實ゝ風景絶佳ゝして譬るゝものなし此所より小笹を渡りて廿七八降るハ初めの別所へ帰る相傳へて勝道上人昔此山へ分入し時白猿出てゝ先導しゝを以て庚申山と名附けしと云へゝ此元より信をゝゝ足らぬ又何ゝ因て唱へ来りしや詳ゝ知るへからぬ風ゝ聞く此神境ハ人寰ゝ遠く殊ゝ絶嶮の地なるハ昔より知る人も稀なりしを元禄の末年都賀郡三谷村佐野信一といふ者藥草を求むるゝ為ゝ此岩窟を探り夫より佳境を開んと聊ゝ

道を造りて人を導く事とハなりぬとぞ併し今の奥院を唱ふる所ゝ山の中腹ゝ為して全山を盡しゝを云ふべからぬ是より道を造りて勝を探らハ得ルいれぞる神秀を見るゝ至るべし炭ゝ聞く此山の別當なる者近頃二三の靈境を探り得為ゝ數里の道を敷演せるの擧ゝ善い哉若此道成就せハ探勝の記事更ゝ數十葉を増なるへし

因ゝ云視ぎる聽ぎる言ぎるの事ハ傳教大師天台の不見不聞不言を以て三諦ゝ表し三猿の形を作て三猿堂を建ら玉よりそハ妄見妄聞妄言せざ

らん事を欲てなるべし又猿と不との訓の通ひ猿と申との字義通ふ故に庚申の日を以て祀きり

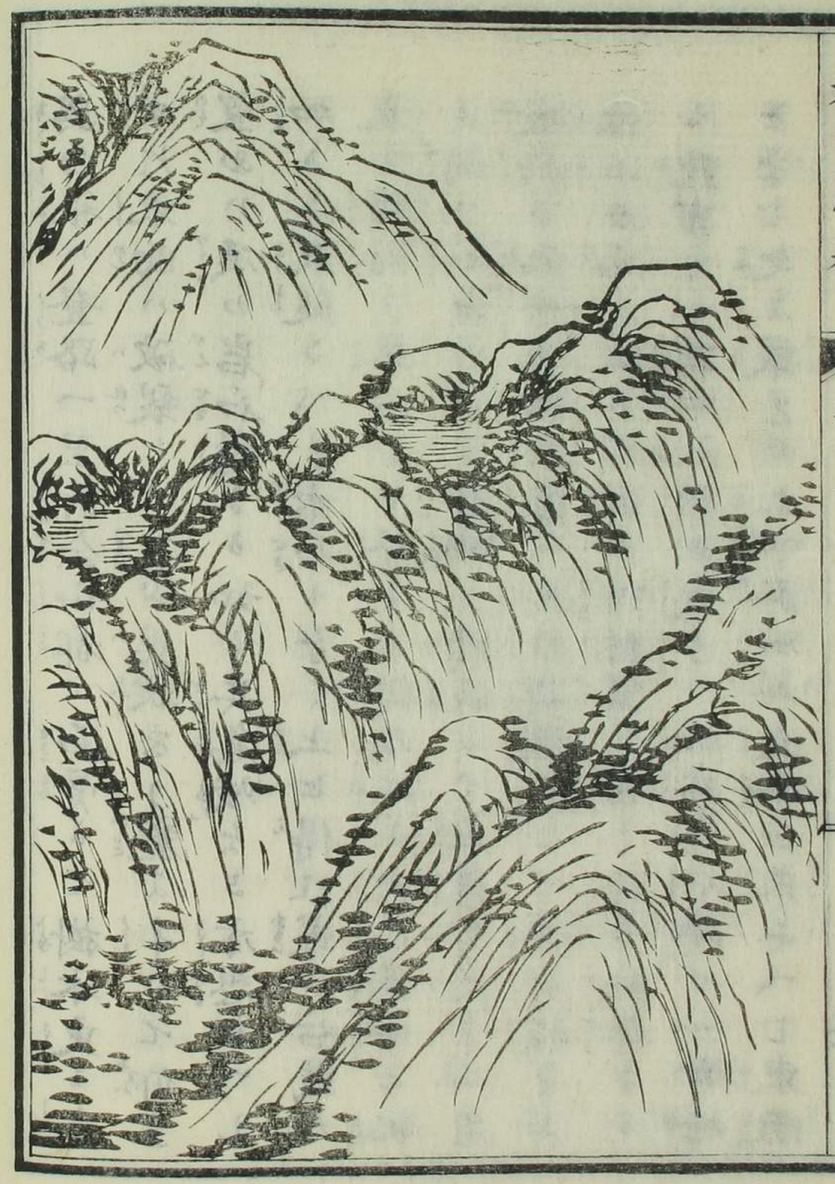
黒檜山　幸湖の南岸日輪寺の南方に屹立し湖水を隔てゝ遥りに男躰山と相對を中宮祠より四里半餘り頂上に軍陀利明王を勸請を東の山麓に夕暮宿多和宿とて昔夏峰の旧跡なり

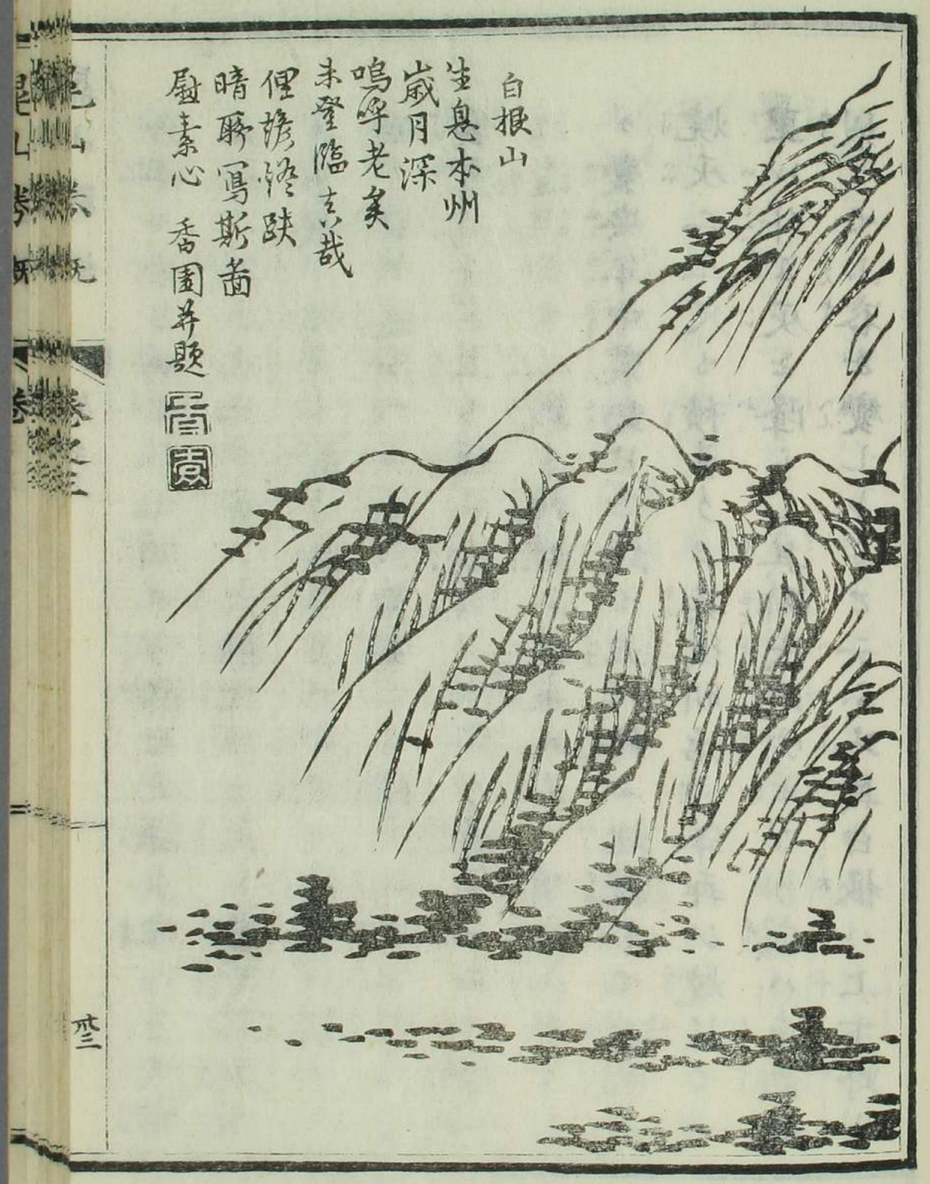
赤岩瀧　黒檜山より遥り西北に方り赤岩と云ふ深山に懸けり中宮祠より五里餘瀧は樹木陰森とる山上より落来り其高さ七餘丈もなら人中間に岩石突起して數沿に分き泡沫飛散をること雨の如く壮觀と云ふべし此所は上州に界をる幽谷にして獵夫杣の外は入る人無きは其名終に現はれ若人煙近き所に在らは屈指の瀑布なるべきに深山に懸るを以て人の尋るなきは遺憾といふも餘りなり又此一里内外に二三の瀧懸るを由聞つるとも夕陽人を待とて故に探るを得ずして帰りぬ

白根山　中禪寺温泉より西に當る高山なり東なるを前白根西なるを奥白根と云ふ登拜道は温泉より六七町行て左へ入り白根沢といへるを十八丸町躋をは右へ登る逕路あり此逕路を十町許攀ち更に又沢

を踰て一里餘り登るハ前白根ゟ達る頂上ゟ一の小祠ありて西ゟ向ふ太郎神を祀るゝと周圍ゟ無數の石を積上るハ宛ら石窟のやうゟも思ハる又山巔各所ゟ矮樹匍匐して自ら庭園の趣を具ふ後を顧るれハ温泉の煙り山間ゟ横ハり前ハ奥白根の高峰峙ちて手ゟ取るべかりなり其間ゟ一湖あり之を五色湖と名附く水底ハ岩石一面ゟ連りて種々の色を現ぜ亦奇と云ふべし暫く軟草ゟ坐して煙草を捫り又孤瓢を傾けて心氣を盛ならしめ之ゟ於てゝ更ゟ奥白根の登攀を試む

奥白根ハ登路一里許全山都て石骨ゟて樹木更ゟ生せぬ東面ハ破裂して甚ゞ異狀なり麓ゟ行て仰き望めハ頂の岩石懸るゝ如く其急峻なる亦想ふべし加ふ取縋るべき木石もなく止と得ぬ或ハ右或ハ左と横切り辛ふして登ると得頂上ゟ大已貴命を祀る祠ハ小なれとも唐銅の鑄拔ゟて永應首元十二月奉納の銘あり此山巔ハ平坦廣濶ゟして其秀拔なる他山の比ふならぬ到る所眺望ゟ富ミ終日徜徉をる飽事なし就中社頭の東方ハ怪岩亀石峙て一奇峰を成し之ゟ攀ハ上下野州の大半を尽くへし東南




白根山
生息本州
歲月深
嗚呼老矣
未登隃去哉
俚擔淫跌
晴聊寫斯畫
聊素心 香園并題

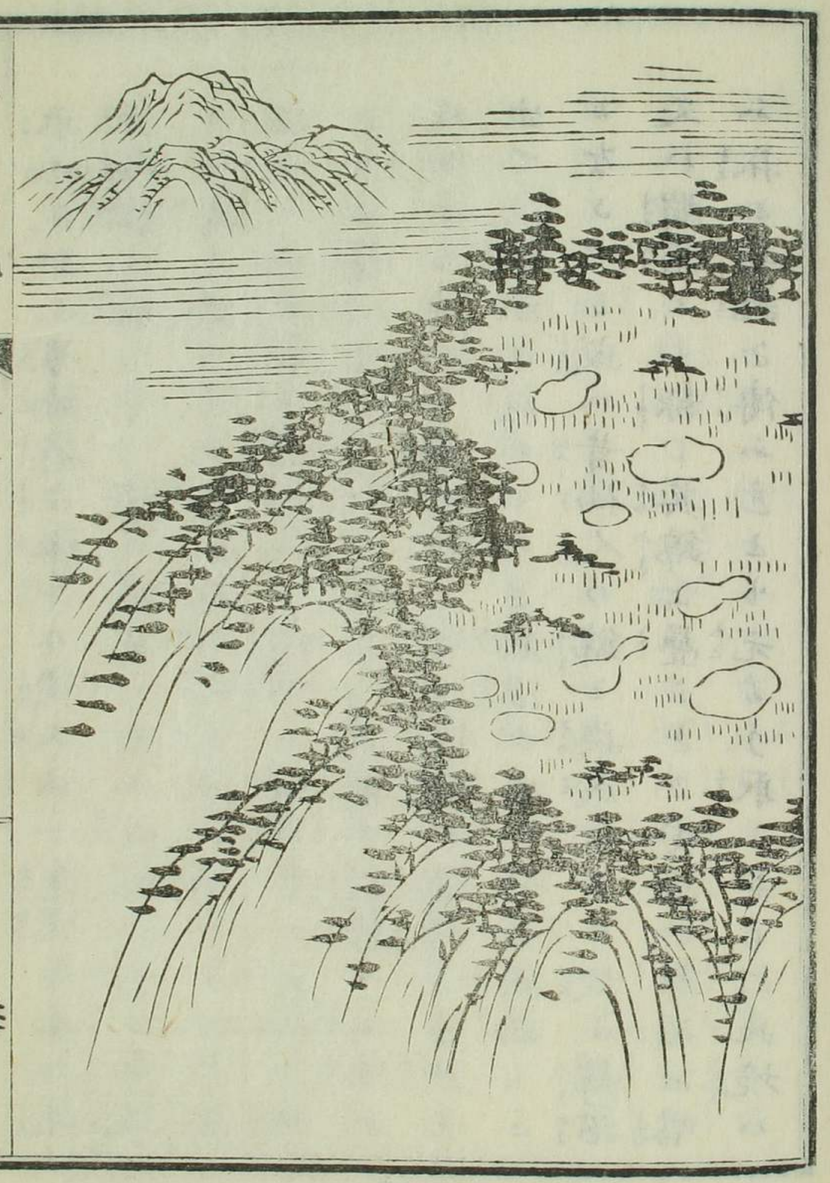
の平らなる所ゑ八九間の方形なる深き穴ゐりて常ゑ水を貯ふ又北の方ゑ大坑穴ゐり大さ數百間其深き事幾千仞とも計り知らぬ也四辺の絶壁ハ削るゑ如く得て近附べからぬ匍匐して僅ゑ坑中を窺へハ雲霧渦まき立ち殊ゑ面白くもゐり凄くもあり思ハぬ逡巡して心戰き躰慄ふ從来此山ハ噴火山なりしゑ慶安年中震動日を經て止ぬ終ゑ炮發して近郷ゑ焼灰二三尺も積まりと其後明治六年再び焼拔て十里以外ゑ灰を降らし其跡大坑穴となり或ハ東嶺破裂して山容を變しとりと云ふ比與白根ハ上下野州の國界ゑて西方八分目以下ハ上州ゑ屬し其境とも覺しき所ゑ一社あり荒山神社と號と則當山の神と同躰ゑして只社號の異なるのミ此神ハ上州方の生土神を崇むまとも年老の者ならてハ參詣を許さゞるやゑ聞けり

金精峠　白根山の東北ゑ方る中禪寺温泉より一里半上州沼田辺ヘの通路なり本名を樾峠と唱ふるよし峠の上ゑ金精權現といへる小祠ゐり祭神審らかならぬ中古何者の所為ゑや銅ゑ滅金せる陽物を納め神躰と為て異称せりと併し樾の名も嵯ならぬ昔ハ

嶮岨なる山道なれい通行人ハ稀なりしゝ近頃修繕を加へてより牛馬共ゑ通行差支なし此山中ゑ一種の異草あり肉蓯蓉と称ス形ち蹄蓋ゑ似て甚ゑ長し腎を補ふの功ありと云ふ

絹沼山　當國塩谷郡の西極栗山郷の奥ゑあり方位い男躰山の西北白根山の東北ゑ方ゑり弘法大師の記文を案ずるふ北望則有湖約許一百項東西狹南北長云云とあるハ此所なるべし全山を黒嶽と云ふゝ頂上平坦なる所のミを世俗絹沼山と称せり此山ハ人煙隔絶の境なれい何ゑより登るゝ定りとる道のある事なし僅ゑ登り得る所い栗山郷の内日光澤と云ふ温泉場より猪鹿の跡を逐へ危岩を踏ミ溪流を渡りて十餘町行い山麓ゑ至るを得麓より登攀一里許の間ハ甚しき急峻ゑして木の根ゑ縋り岩角を傳へ辛ふして斜面なる小笹のある所ゑ至る夫より更ゑ小笹を押分て十八九町行ハ初て山巔ゑ達そる也頂上ハ大師の記文の如く廣闊なる平原ゑて東西十二三町南北十餘町中ゑ三十有餘の池沼あり最大なるを絹沼と称ス方六十間許世俗之を絹川の水源と云ふ外い或い十間或い十間の小池ゑして金沼銀沼、

鶴沼、亀沼、瓢箪沼、笹沼、壺沼、釜沼、蜥蜴沼、菖蒲沼、その他種々の名を有する物集るゐ遑らに共ゐ清水湛へて一綫の塵芥も浮ふことなく又一隻の幺蟲とも生ずる事なし只蜥蜴沼と称する所ゐのみ数頭の蜥蜴と見る亦奇と云ふべし且池沼の水い如何なる旱天霖雨ゐも耗らに溢ずに古へゐ異なる事なしと原中ゐハ尺ゐ盈さる霊草一面ゐ茂生して色々の花を開き宛も花氈を敷連ねたるゥ如く抜取て之を熟覧をるゐ人衆ゐ見ざる所の物多く何共名附るゐ由なし其上を跣足ゐて歩をるゐ柔軟ゐして一の障をる物なく又氈を踏ゐ異ならに只原中到る所水分を含み て坐卧をるを得に然まとも各所ゐ梅白檜の類風雪の為ゐ伸得に恰好ゐ蟠屈して巧ゐ其上ゐ腰打掛て休憩をる却て坐卧ゐ勝ゑり都て境内い絶岩危石の嶮もなく幽遠清爽ゐして仙人界も斯やと異まる故ゐ飄尽るゐ更ゐ帰ると忘ゑ夕陽の傾くを見て初て帰途の遥なるを覺ゐ真ゐ無比の霊境なり上世此池沼ハ一の大湖ゐてありしを年を経るゐ隨ひ木葉杯の為ゐ埋うて数多ゐ分ると云ゐ説も信ゑとも天然の地形ゐ因て考ふゑい皮て然らに去なから圖ゐ



绡沼圖
香園

示せる如く男躰與白根等の頂上より遠望せは諸沼殘暉を浸して一湖の樣なれゆ故に古人も見誤りて斯く傳へたるならん又此池沼の水ハ三方へ分流し一ハ當國を流るゝを絹川と云へ一ハ岩代へ流るゝを疊川と云へ一ハ上州へ流れて利根の上流と成るとも云へと覺束なし此辺の溪間より流れ出てゝ水流を成すものと池沼の水なりと誤認したるなるべし或ハ昔仙人の錦を染成せるゝ故に錦沼又ハ絹沼とも称し其錦を疊とする支流を疊川と唱ふ抔と妄説を傳ふるとも元より取に足らぬ此境ハ

中古の發見に係る物にして古名抔のなるべきにあらぬ當國の絹川ハ和名抄にも河内郡衣川驛家云云となりて古くより傳へたるとハ其水源ならんと想像して後世絹沼と呼とる事疑を容ざる所也

編者曰晃山十里以内ハ勝區名跡相接て筆をるに遑なられ就中區域の大にして幽奇を擅にするものハ庚申山と絹沼山の二所とも是晃山の両翼と云べし庚申山ハ嶙峻の勢を現し絹沼山ハ幽遠の趣を具ふ共に弟とり難く兄とり難し蓋し怪岩奇石ハ山の本色にして天下に少しとせぬ獨絹沼

山の如き數里上の絶巔よりして千古無盡の水を貯へ異草と生して營々とするものハ内外未と見聞せざる所也故ふ評して勝槩中の尤所と為ハ非歟

栗山郷　塩谷郡の西端よりして日光の北ゑ方ゑ旧神領と称するハ左の十箇村なり

一　高十八石。四升　家數十三戸　川治村

一　高九十九石八斗七升　家數九二戸　西川村

一　高二百六十六石一斗四升四合　家數六十九戸　湯西川村

一　高百十三石六斗。六合　家數七十二戸　日向村

一　高六十七石九斗四升五合　家數三十戸　日蔭村

一　高五十七石五斗一升三合　家數九戸　土呂部村

一　高三十六石三斗九升四合　家數十戸　黒部村

一　高七十五石三斗。四合　家數九二戸　上栗山村

一　高三十三石四斗九升　家數九戸　野門村

一　高七十二石二斗九升二合　家數三十二戸　川俣村

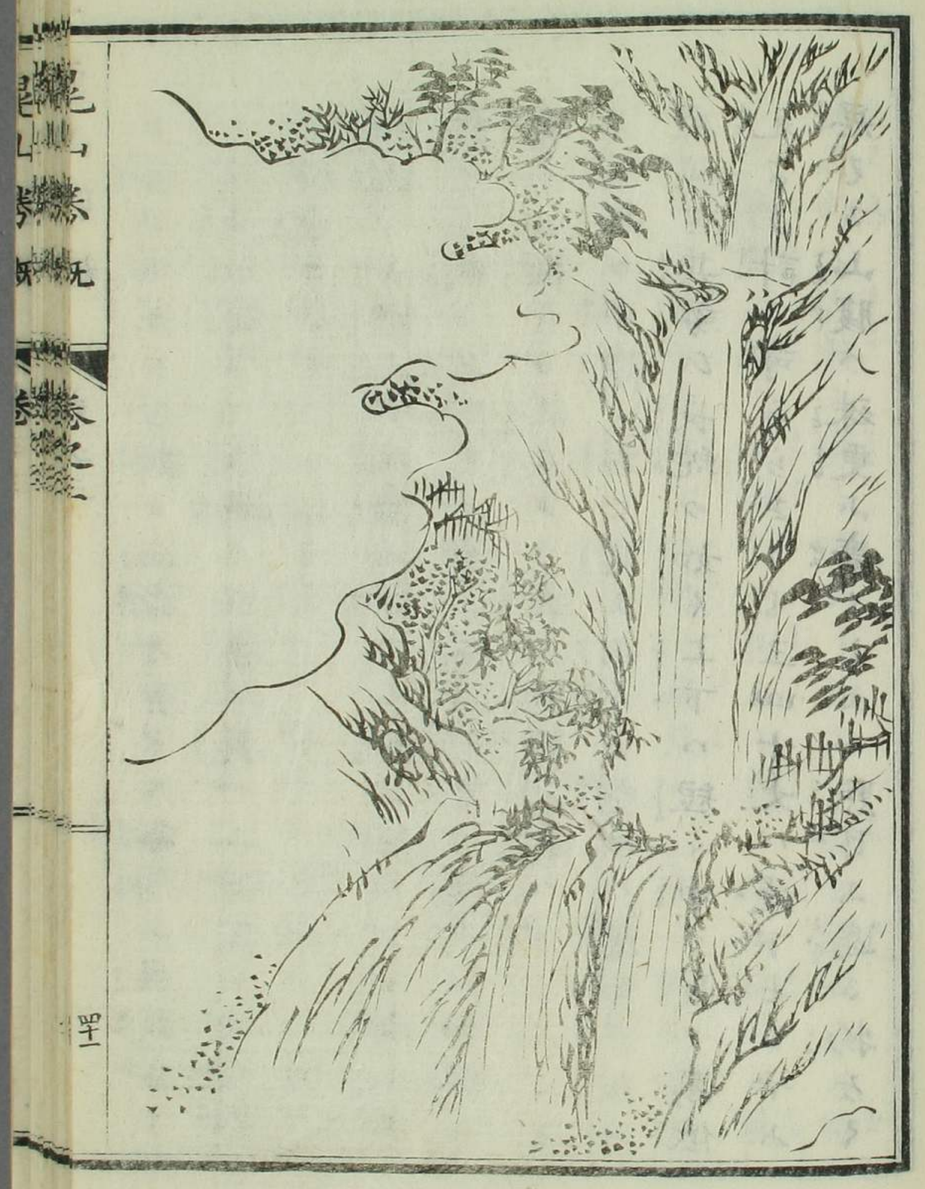
右神領當時の調査ゑ係る

此郷西ハ上州ゑ界し北ハ會津ゑ隣る東ハ高原の山脈を限り南ハ日光の諸山を帯び四境皆峻山を遠らして別世界を成せるのゝ如し他方へ出るゑ只四條の嶮路ゑるのゝ一ハ野門村より帝釈小真子の間を

越て日光へ出一ハ上栗山日蔭村辺より河内郡小百村を經て今市へ出一ハ川治村より高原の麓を過て那須郡へ出一ハ湯西川村より芹沢東西の嶮を躋り旧會津領御蔵入と云ふ所へ出るなり其境界頗る廣しと雖も山間僻所ゆ散在せる村落ゆして一歩の水田もなる事なく島地とても岩石の間を穿ちて作る所なきゆ登實せる物至て少なく僅ゆ雜穀を收るも半歳の口を糊せるゆ足らに故ゆ鳥獸を獵し菌類を取り或ハ板を挽き或ハ木鉢扱子曲桶木履等を作りて日光今市辺へ輸し米穀ゆ替て僅ゆ生計を營む

因て常ゆ食せる物ハ粟稗ゆ聊か米を交せ味噌ハ豫實へ塩を混して造るものゆりと云ふ然るとも此地の人物ハ躰格岩狀ゆして男ハ褐縷を纏ひ終年梳らざる者多く只勞力を為を速らゆ且重荷を負ひて山路を躋る事恰も平地を行ゆ異ならに女ハ猿袴方言モクとなして男子と共ゆ勞ゆ就き且駄馬を逐ふを常とに保し何ぞへ出るゆも山路嶮隘加るゆ牝馬のみを使役せるゆより米五斗を以て一駄と定む他の荷物も其量を超れハ駄をるを得に故ゆ材木其他を各方へ輸せるも格別駄賃の上を出に理財の困難な

如寶山裏
三界瀑布
素堂画

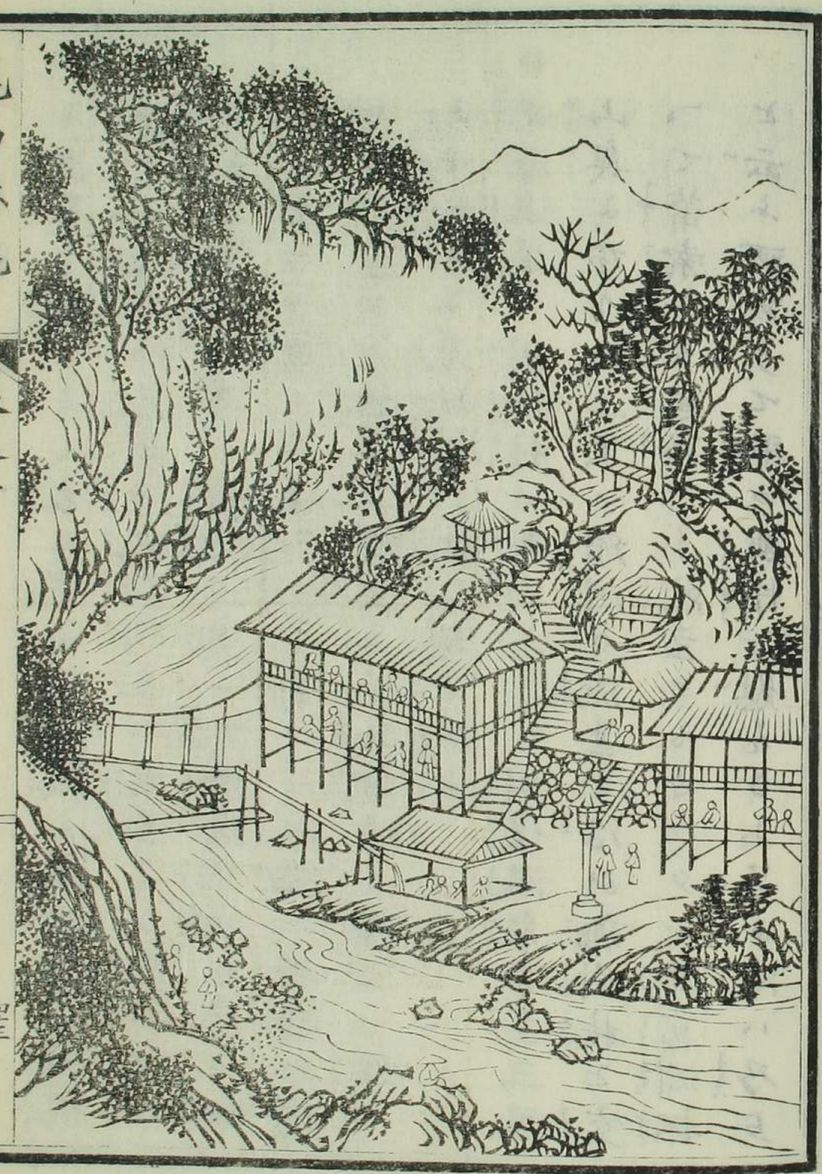


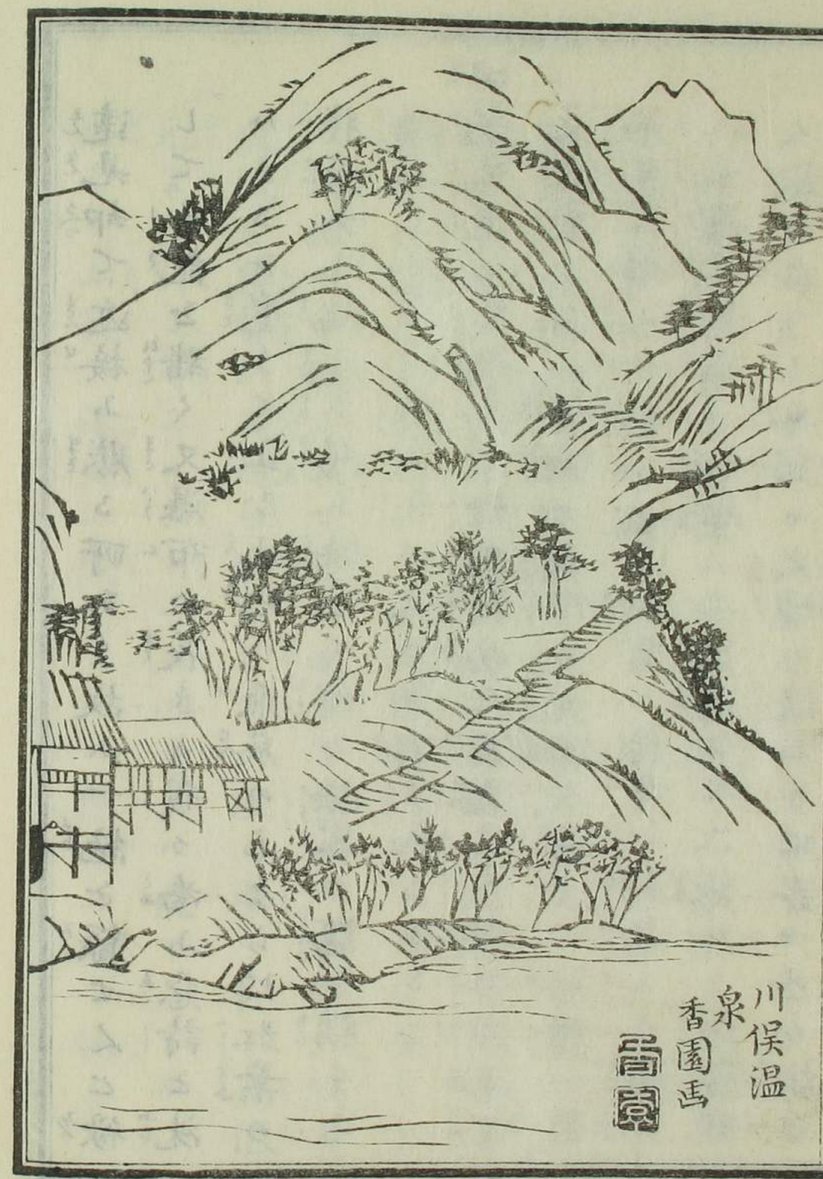
る知るべきのみ斯る山中なれども各所に温泉あり
又風景の見るべき物もなきば其一二を記して外郭
の結末となす

三界瀧　女貌山の北裏に方りて峰を隔てとる深山み
懸垂り故に近附見る事を得ぬ眺望の場所は帝釈小
真子の間なる馬立より栗山郷野門村へ下らんとな
る坂路の中腹に在て遥に南方を望めば瀑布三級み
飛流は其勢ひ長蛇の如く上下は短く中は長し高低
元より計る可からざるも三四十丈は飛下せるやみ
思へる山腹は殊更に廣くして一點目に遮る物なく

遠見却て近接に勝る所あり故に一絶を録せんと欲
して手記を繕く又瀑布の長きも我が為に悪詩を洗
はさるを覺りて止む此地は飛泉のみならず紅葉の
勝景あり満山夕陽に映して殆と騒客の腸を腦まし
惜むらくは僻所に在て人の耳目に入らざると

川俣温泉　日光より野門村迄六里夫より川俣温泉迄
又三里と云ふ温泉は絹川の北岸に沿うて浴槽二箇
所共に婦人一切の病み功有と湯守は村持にて當分
八木澤某擔當を客室は二階造にて二棟あり浴客百
人餘を容へく毎室に火爐の設ありて手つから炊く




川俣温泉
香園画

ゝ旅籠を要もるゝ客の望ゝ仕を誠ゝ氣樂なる浴場
なり此温泉ハ元来日光御門主の主宰もる所ゝして
浴場ハ勿論道路の修繕ゝ至る迄皆御門主の意ゝ出
ると聞けり故ゝや栗山郷ゝ屬もる山路ハ破損の場
所もゝまと大抵手入行届きて危嶮なる事なし併し
九々折なる急坂ゝハ殆と閉口仕る

日光澤温泉　川俣村の部内ゝして川俣温泉ゝより三里
山奥ゝゝり此三里ハ絹川の流まゝ沿ひ雜樹枝を交
ゝて蕭索とる逕路なり然まとゝカツタテ滝宮淵抔
と云ふ所ゝありて聊ゝ幽情を慰もるゝ足る滝ハ乃ち

絹川の流水高さ三丈許の絶岸ゝ下るゝものゝして水
勢頗る大なり又其岩石の奇異なる鬼工ゝ異ならに
淵ハ滝の上流ゝゝりて北岸の岩石ハ建屏の如く南
岸の大石ハ虎踞ゝ似とり其間ハ激流渦まき立て淵
底計るべからに其形勢含滿ゝ髣髴とり是ゝより一里
むかり溪流を遡まハ温泉ゝ達もる浴場ハ深山の間ゝ
介まりて境界殊ゝ狹く僅ゝ東の一方開けとり浴槽
ハ並ひて二つゝゝり主治大抵川俣温泉ゝ等しくして
功能ハ遥ゝ優まりと云ふ

白絹瀧　日光沢温泉ゝより五六町奥ゝ在て黒嶽の山脉

日光灩
白練瀧
素堂圖

ふ懸まり此辺の沢を恐シ沢と称するゆ故ふ土俗等恐シ滝とゝ唱ふ此滝ハ遥う山上の緑葉閃々とする間より落来りて高き事何十丈とも計り知らぎれ其水漸く下り更ふ麓なる八九丈の懸崖を飛下る其懸崖ふ突起せる所ゆりて水勢二派ふ分ぎ恰も素練を懸るふ異ならぎ白絹の名爰ふ出るゆ又一谿を隔てゝ南の山ふ懸まる滝ゆり水細け迸とゝ二級ふ奔流して高さ六丈てあり其他小滝各所ふ懸りて共ふ絹川の水源を成る此所ハ人衆を避る事遠きゆ故ふ温泉ふ浴する外ハ来る者稀なりと云ふ

湯澤　川俣温泉と日光沢との中間より二里ばかり南の山奥ふゆり此辺ハ定まる道ゝ無れハ溪水を渡る猪鹿の跡を尋て涌湯の所ふ達する也湯口ハ三四箇所共ふ硫花を吹上て圓筒の形をなる大なる物ハ周囲三四尺高さ四尺許其中より吹出る湯ハ龍水の如く極熱ふして手を觸るゝ事能ハぎ見て奇と呼ハさる者なし若し之を分折しさらんふハ多少の功能ふゆるへきふ徒らふ捨置ハ亦遺憾ならぎや

湯西川　栗山郷の東北隅ふ位する村落ふして日光今市両所より共ふ十三里と云ふ家数六十九戸草高二

百六十六石余栗山郷中主眼の所とも殊ゝ湯西川ハ村の中央を流る其流に沿ふて藤倉湯、河原湯、新湯、御所湯、ヤケン湯の五湯あり功能各々異なるとも藤倉の湯ハ温氣の病ゝ尤も功あり此地ハ何れより入も山道嶮岨なるとも盛夏の節ゝ至るハ浴客數百人常ゝ絶ぬと云ふ

晃山勝概

拾遺

山内旧寺院坊舍　學頭一院衆徒十箇院別當所四箇院六供一院合せて十六院之と一山の大衆と云ふ外ゝ八十坊あり

學頭　修學院と號し佛岩谷ゝあり一山の學問所なり此寺の表門ハ元御殿の門なりしを享保年中當院ゝ賜ハる此門ハ室町家の造營と移き是し物ゆ名世ゝ稀なる匠作なりしと云ふ

衆徒十箇院　佛岩谷東山谷中山谷の三所ゝあり

養源院　華蔵院　惠乗院　法門院　讃光院
藤本院　醫王院（以上岩谷佛）　遊城院　日増院
教城院　禪智院　櫻本院　南照院　安居院
唯心院（以上東山谷）　浄土院　觀音院　實教院
光樹院　照尊院（以上中山谷）

留守居　當山御門主ハ東叡山と兼務して台宗一流の法務を管領せらるゝ ゆゑ多くハ東叡山在住なり故ゆ留守居一人を擧て院代とも是ハ衆徒の内より一院兼職せるものゆて法務の階級又ハ老若等ゆゑ由る ゆ非ゞ其器ゆ當る者を撰ミて任ずる事なりと因て御門主の家臣并ゆ社家伶人以下宮仕神人等ゆ至る迄皆留守居の指揮を從ふ

別當所四箇院（當山別所と唱ふ）

安養院（新宮別所）　龍光院（靈屋別所）　大樂院（東照宮別所）　無量院（大師堂別所）

八十坊舍

正住坊　祐源坊　圓乗坊　觀妙坊
堯心坊　鏡德坊　正定坊　妙力坊　通乗坊
大月坊　龍觀坊　常觀坊　龍圓坊　淨久坊
林教坊　妙日坊（以上岩谷佛）　妙月坊　妙金坊
真鏡坊　日城坊　本龍坊　光榮坊　悅藏坊
城秀坊　杉本坊　鏡泉坊　大光坊　祐南坊

永觀坊　實勝坊　能觀坊　道福坊（以上東山谷）
勝泉坊　本月坊　圓觀坊　城了坊　城空坊
通順坊　光蔵坊　通勝坊　忍性坊　仲音坊
常音坊　行實坊　醍醐坊　守光坊　城祐坊
妙珍坊（以上南山谷）　不動坊　智觀坊　碩善坊
圓祐坊　櫻正坊　教觀坊　深妙坊　定福坊
正圓坊　慶住坊　正範坊　觀德坊　唯教坊
什光坊　永南坊　圓泉坊（以上西山谷）　大輪坊
光禪坊　禪教坊　順教坊　實蔵坊　文月坊
理宣坊　蓮勝坊　教光坊　妙圓坊　深教坊

金蔵坊　正覺坊　櫻秀坊　林守坊　道龍坊（以上善女神谷）

再興寺院坊舍　當山ハ前の如く元亡六箇院八十坊ヲ
ヨしう明治四年官命ヨ依う悉く本坊ヘ合併し畢ぬ
同十五年當時滿願寺住職彦坂教正の發願ヨ出てゝ
左の十二箇院三坊ヲ再興せり

十二箇院　讓光院　華蔵院　法門院　醫王院
禪智院　櫻本院　南照院　淨土院　光樹院
照尊院　安養院
三坊舍　道福坊　教光坊　金蔵坊

延年舞　毎年六月二日三佛堂の前ゑ敷舞臺を設けて奏せる踏舞也衆徒の内附弟の両僧ゑて之を演せ其行装ハ各々白の五丈袈裟を以て頭を裹ミ緋純子地ゑ牡丹唐草の模様ゆる直垂を着し白の大口袴をき鮫柄の短刀を後ゑ挿ミ鼻高皆を穿ち両僧相並て本坊より練出せ頌歌の僧ハ後ゑ扈役し外ゑ白丁着数十人相從ふ其所ゑ至ハ舞臺の内ゑて両僧昏々舞ひ中項より一人ハ黒の立烏帽子を冠りて踏舞せ衆僧ハ舞臺の後ゑて頌歌を唱ふ其調俗耳の解をぐき所ゑゆらに舞終ゑい前の行装ゑて本坊へ引退く

也旧記を按るゑ此踏舞ハ古昔慈覺大師唐土より傳来せらゑさる秘曲なゑを嘉祥年中當山の衆徒ゑつとへて摩多羅神々事の舞曲となし以来十二月晦日の夜より正月七日の朝迄常行堂ゑ於て修正會と称せる秘奥の法儀を修行の砌日々此舞曲を奏して天下泰平の法樂ゑ備へしと云へり後元治年中但馬法印辨覺の時始て三月二日新宮の神事ゑ移し後世又四月十七日東照宮祭典の節新宮社内三佛堂の前ふ於て之を奏し了りて後神事を執行せしゆ明治維新改革以来此儀を廢し單ゑ本坊境内ゑ於てのミ修

もの事とハなり叡

大千度　社堂順拜の行也此修行ハ昔開山上人山河跋渉の時神佛の冥勅を感して所々ゑ社堂を營み置き し と後又悉く當山内ゑ勸請し日々其大小の社堂と回拜して法施もる事なりと是ハ秘密の行ゑて其途中若し知人ゑ値ふと心決して言と交へに世俗ハ其作法と知らぬハ無言の行ゑやと云へり明治革新後久しく廢絶せるを近頃衆徒の發願ゑより再興の舉なるやゑ聞及へり

鳴子符　此符ハ半紙四切位の紙ゑ種々の物形と印刷

しさゑ物也是ハ八峰行者山中ゑて途と失ひ或ハ雲霧ゑ遮らるゝ等の時此符と蒔散せハ忽ち前路と求むと云ふ故ゑ魔除の守とも唱ふ

強飯　當山吉例の強飯ゑて日光責ゑ因もる所と云ふ其式ハ一坊等山伏の姿ゑ出立種々の舉動となして甚さ丈敬の態ゑ似さ也とも古實の法式なもバとして將軍家并ゑ御門主初て登山ゑ也ハ名代として待醫或ハ坊官一人出てゝ強飯と頂戴も此式ハ例年陰暦正月本坊ゑて賜ハり又諸家より申入ゑ也ハ賜ハる事なもとも強てハ勸めさる法なりと云へり

偖強飯の作法い先一通り膳部を勸め過半濟ける頃次の間よて螺を吹立物凄き情況をなし一坊等三四人兜巾篠懸を着け真紅の太き紐を環襷となし山伏姿よて座敷へ出るよ両臂をいからせ大音聲ふ當山古實なる嘉例の法式として東照宮并ふ日光三社權現より膳菜を下さる謹て頂戴せよと云ふ其時一人同様の姿よて唐銅の大平鉢へ飯の高盛を持来りあつあつと持ふと云て與ふ又一人大音ふ當山の古式東照宮より下し置る膳菜一杯二杯てもない七十五杯取揚てのめそふ容易ていはゆくまいそ殊よ當山の

珍物中禪寺の木辛皮蓼海の蓼寂光の生大根おせんざいの唐からし御料理として之を下さる有かさく頂戴あろふ容易ふ心得ていなるまいそ殘らに取揚てのめそふと云ふ又一人大皷の撥の如くなる棒と二本持来りて敲きとて又一人藁を太き縄ふ綯り鉢巻ふしべきやうふ拵へとるを持出毘沙門天の金甲武運長久息災延命といふて此方の頭上へ箍ふてめ七十五杯一つも殘さにそらしとのめそふコリヤ〳〵引又一人捻棒と大煙管を持出て膳の向へ置て容易ていはゆくまい取揚て殘らにのめそふと云ふ其時又次

の間より螺を吹立板を敲き立てゝ騒きける客ハ時宜を見合せ無言より出て誓首逡巡して其座を退く事也此強飯ハ頂戴せる者の階級より仍て少しく異同あるとも狼籍より似たる挙動ハ大抵同しと云ふ此式明治革新後廃絶せるとも當山より縁古なる貴人ハ本坊へ乞ふて式を受るやゝ聞けり

十神事　神いさゑの神樂なり春より夏に至る其間ハ日々神人等新宮拝殿より て絲竹を鳴らして鼓躁せる事なり遠近の邑里より講を結ひ永代十神事神樂と唱へ社人を請して執行せりと云ふ

鎌倉立神事　明治維新前本宮社前より於て行ひる例典なり其式ハ毎歳正月二日正午本宮の社司宮仕神人等相集り拝殿に於て太鼓を打鳴らし夫より別所に會して宴を開き宴畢ハ鎌倉へ赴くべき者両人を撰び餅五十切懐紙三帖鳥目二百孔を與ふ其者等直ち出立せべき装ひをなし假橋を渡り下馬の辺まて至りて帰る事なり是ハ昔乱人ありて當山をおそひ討んとせし時防戰して之を破り其勝利を鎌倉に報しとる嘉例とせる神事なりと云ふ

床之神事　元来毎歳正月二日の夕に修せる神事にし

て火爐祭なる由同夜田大樂院下御供所に於て採燈
護摩修法終るに机上に錫杖と中啓とを置きこれを持て
暫々舞ひ謡ふ歌舞終りてじむんじむんと呼ぶ時に
俗人種々の裝ひをなして踏舞と舞止めに大樂院の
大茶間にて銘々に千歳餅と出し夫より更に俗人出
てゝ躍りなから餅を強るなり是も終るに大なる木
鉢に種々の雜物或に手遊の品或に野菜菓子供餅其
内に金子杯も入て座中に蒔散し一同どつと爭ひ
拾ひて退散する事なり此神事に東照宮並に新宮本
宮瀧尾寂光中禪寺等の各別所にて夫々に修せしろ

明治改革以來廢絶し方今一月一日四本龍寺に於て
修行すと云ふ

鎮火祭　維新以前瀧尾社に於て毎歳正月元日の夕に
修する祭典なり當社に東照宮の社家二箇なる者社
務を司る事なりしろ元日に東照宮の儀式なるを名
其式終りて當社拜礼に來る頃に必ず黄昏過となる
然るに先年貉社家に化け來りて饗應を受し事あり
と其以來に真の社家來るとも青松葉を以て爛をと
例とせり土俗之を傳へて貉いぶしと云ふ

瀧尾社寶物　珍宝多く輪王寺に蔵を只石劒
太刀及御手筐のみ神社に属せり

佛舍利　宝塔八

弘法大師筆六字名號　一幅

大錫杖　一本　建久三年三月十五日　紫阿弥陀上人寄納

瀧尾建立記　一軸　勝道上人遺弟　道珍僧都書

石劔　一振金襴袋入

太刀　三振

般若面　天正十二年四月大嶋丹後守宗光寄納

定順作面　永禄三年清原徳春寄納

阿彌陀經　一巻　百二十行　伏見帝宸筆

化城踰品　一巻　三百三十七行　後伏見帝宸筆

不經品　一巻　百三十八行　後醍醐帝宸筆

御手筥　安貞二年平朝臣助永寄納

尺鶴面　右御手筥内ニあり

翁面　同上

右劔左劔不動尊　二幅　弘法大師筆

般若心經　草書　右同筆

不動尊　木立像二尺許　右同作

毘沙門天　右同断　右同作

三尊阿彌陀　恵心僧都作

此餘の寶物枚擧ニ遑ナシ

霊屋實物　龍光院所蔵の物のことを掲く

やま樹　一本箱入　高さ三尺許枝あり黒き事漆塗の如し箱蓋に仮名にてやまと記せり延宝二年相州三浦にて蜑婦の拾ひとる物なりと記せるハ非なり佐渡の産なる枝松の種類にて北海に多く見る所なり

雲山茶壺　一個錦袋入　周廻二尺許口廣し

八代茶壺　一個錦袋入　雲山より小にして口狹し

枝珊瑚樹　一株　長さ五寸許三本立の小枝あり

大白石英　一個　六方石にして周廻一尺五六寸高さ一尺許上の方ハ透明下の方ハ

薄黄色玉　一個　大き一尺廻り透明なり玉を持て透し見るハ皆倒に映る

象牙五重内雙六簑八彫物　一個　大き三寸廻り種々の摸様を彫り透し中に実あり器を以て採るハ廻るなり

後水尾帝宸翰　一幅

一品天真親王筆跡　一幅

大猷院筆跡　一幅　大猷院八歳の筆松の繪に哥あり

きくせいのうつるのそらなる風さきのもとにもとめてあるとい

大猷院筆跡　一幅　七言句

誰言春色役東到露暖南枝花始開

一品天真親王筆墨画文珠　一幅

大猷院筆岩に鶴領画　一幅

探幽齋梅鶯画　一幅

鎧　一領　大猷院御召紺糸威

兜　頭形獅子の前立物しろとゝ云ふつきもの角と耳とハ金にて其外ハ黒塗なり　面頬涎懸小手臑當佩楯等ハ皆黒漆塗

花席　八枚　紅毛渡り長き七尺幅四尺許

貝　二個　平貝丸貝内一枚ハ赤やこゝ似たり

時計　一個　五寸許鉋なし

念珠　一連　一粒ハ五百羅漢躰にて影を写す

獨角獸　一本　長さ三寸許周り四寸許

堆朱丸香合　二個　径四寸許

經箱　二鉋　山水花鳥極上蒔繪四方組上覆黒塗梨子地の紋散し上箱桐春慶塗

蠟石人物　一躰　長サ六寸許石質ハ白赤黒交り面躰皮又の如く其面と両手ハ黒色衣服の所ハ白赤也

竹根人物　一躰　長サ五六寸天竺人の寐る形ちなり

銀香合　一個

銀天目茶具　一個

硝子蟲籠　一個　紅毛渡り質ハギヤマンにて蔓唐草の如き刻あり一隅に柱二本宛四隅ハ本立上ハ銀四分一の如き金ふ阿闍人物有州しの繪あり製作頗る精密なり

心經巻物　一巻　長さ六寸許弘法大師筆

涅盤像巻物　一巻　此巻物始め大字にて横に一字行躰に書し末に大字朱印

二つあり夫より
彩色の繪なり
経箱　一個　法華経及大乗妙典等種々の巻物あり是攝家大臣其他三家及諸大名の献る所なり上箱ハ黒塗蓋ハ金泥にて其官位姓名を誌るせり
佛像之拭物　尤餘幅
此餘輿院ハ種々の玉と也之を器也
若子社寶物　神ハ属也る物ハ二荒山神社ハ蔵し佛ハ属也る物ハ輪王寺ハ蔵せり
十二の手筐　二寸ハ三寸内ハ小貝入
白鞘小相口　信國作
白味鏡　一面　外ハ五六面
桜　一本　長さ一尺許外ハ織物道具種々ちり

牧道具　紅堵口歯黒道具眉刷筆
曲玉　三個　梨子地香合入
法華經　數卷　筆者不知
彌陀經　一卷　紺紙金泥櫻町帝宸筆
錫杖　一本　長さ六尺許箱入柄ハ赤木五本作忠秋と添書あり
衣裳　一重　唐綾模様御門主の奉納
釘念佛緣起　一軸　此緣起ハ元禄年中一品公辯親王筆巻中の圖繪ハ狩野常信の筆其全文ハ左の如し

粤ハ下野國日光山の別宮宝寺覚源上人西方ハ志深く念佛多ゆ願ら以勤行りに或時ハ夢ハ

にして俄に息絶ぬ側に活りし軍鷲き等主と共山へ
まやうもなく荼毘の儀営まんとせるう上人の肌膚
猶温にして生るが如く在主の聖遺の送も見合一七
日の夜を取斯て人々怪み歎し此次の
形成を待る我間主宮に参るう丈玉来に告て宣ふい
汝今茲に来るべきうたられたき主七日安楽の経生邪
見にして地獄に落るものの多し汝ふ地獄のたのとを
見せ衆生を救い彷人為なり別大王の数に造ひ地獄
を廻り巡るう大地獄百三十六所地獄の数を知ら
ん若しを愛る者を見るに悪を欲くに堪ん間主宮い

く色夫癸歎にして悪と作ること限なき罪ぬい死し
て後四十九日の宮四十九の釘をうとる罪業の深浅
に依て釘の長短あり六寸八寸一尺六寸なり頭に三
つ左右の肩に二つ為に六つ腹に二十脇に十四足
の左右に四つ合せて四十九なり此釘をおろすとき
若し叫ぶ者上に有頂天に響き下い阿鼻底に閻魔
王深く驚きて自業自得の報なるい此者を除くこ
と叶ふとく娑婆に於て仏と供し僧に布施をる功徳
に依て生者し消く滅せとといへとも此三年為に罪い
此釘抜ること能ず泥犂に堕せしもの

なるに八速り本國へ帰り速育の衆生を教化し四十九
万遍の念佛をとなへむべし此念佛の業満ぬるハそ
苦しみを免れへし人〻死して七日五日の白き餅
を四十九箇ゝゝ四十九の四辻ゝゝ折ゝ釘を持し
此餅をおもむんとなり又四十九の卒都婆を建るも
この釘を持し佛弟子とも成さん功德なり緩念士魂怨
怒を慰むるとも退病体善の功に依て四十九の釘の苦を
除き都率の内院に至るべし況や生涯のうち此札を
受てうつうら四十九万遍の念佛を唱る輩ハ往生
疑ひなしとて札一枚を授くと覺て夢の覺るハ地

そと上人具に語り斯て上人手を開き見給ハ五輪
に四十九の釘完有札あり誠に難有事とも云ハ
るものの閑もの奇異の思ひを為し郎兄の軍忠に信心
深く成て此札を写て念佛供乃せんと願へハ上人
閻王の授け給ひし札を写し梓に刻て廣く施せり叔
世末代に至ても覺る不思議の有り叔迄無怠なるも
のゝ教なりと浅ましき覺けるとぞ云云

文明十三辛丑年六月　　弟子沙門證誠晃山寂光寺上人

右の縁起ハ御門主の筆跡に係ると以て一字をも苟
且にせず原文の侭を寫し置ぬ

旧中禅寺別所什物

古棟札之寫

人王八十四代
順德天皇御宇
奉建立一間二面御殿一宇
征夷大將軍
源實朝公御代

藤原國綱妻子
景綱入道妻子
宗綱入道妻子
親綱入道妻子
藤原有房妻子

建保五丁丑年四月十八日　鎮守之地頭
同　六年戊寅　七月十九日　結緣衆左衛門尉藤原朝政

保延久壽永暦文治建久等より後ゝ造營の度毎ゝ數多出ゝ之餘ゝ之を畧す

同別所什物

磬之圖

光明真言ノ文アリ

奉施入
男躰權現
建保五年丁
金剛佛子
淨智坊
献宣生年六十三
大工藤原兼則

波之利大黒影像

方今常行堂の後堂に安置
影像も亦同所より出せり

古記に曰く往昔一山の衆徒中に城華坊と云ふあり中禪寺の上人職とりし時毎歳秋に至るに何方より とも知らに一疋の鼠粟稗の穂を引来りて別所に獻ぜ上人思ひらく斯る山中に粟稗抔のあるべき謂を

なしと竊かに鼠の足に糸をつけ其跡を慕ひて山を下るに果して麓に人家ありける則其地を本山の寺領と為し鼠の足に糸を付て見出しとる所なるを故に足尾郷といふ名附しとや是より此鼠を崇めて大黒天と祀り大黒天は十二支の子を主とる故なるとそ然るに彼鼠自然に大黒天の容を顕し其様走るの態ありとて時の上人之を波之利大黒天と尊称し崇信の徒へ其像を印施せりと云ふ此波之利と書そるに海上を航するに船の速かに走りて暴風に遭ふも其難に遇はざる意にて船中の守護神とも為せり

元て諸々の願成就せる事走り行り如く且此像の
五大願とて貧人ハ福徳を授け疾病ハ療薬を授
け造悪ハ善心を授け短命ハ延齢を授け痴鈍ハ
ハ智恵を授くる等なりと云へ傳ふ

古釜二口　一ハ径四尺許高さ二尺七八寸中ハ聖純阿
彌陀佛右ハ貞和二年丙戌二月日左ハ奉施入中禪寺
と銘せり一ハ少數大形ハて下野國日光中禪寺御穀
釜願主上州佐貫庄藤原朝臣沙弥道慶應永三年丙午
三月十八日と微かハ見へとり二口共ハ底朽ち所々
毀損せるとも古色掬せへし

古鐘銘　此鐘ハ文化八年の火災ハ罹るを以て翌九年
新鐘を鑄造せる時左の古銘を載せて前大僧正凌雲
沙門尚詮と銘せり

日光山權現御寶前　奉施入鑄金一口事
右志者為左衛門尉藤原政綱北方藤原氏并所生愛
子等御息災延命恒受快樂心中所念決定成就也
建保三年丙子三月廿二日
願主左衛門尉藤原政綱

古碑銘　元唐銅鳥居の側ハ當上人覺音坊
明治維新後滿願寺へ移せり

此古碑ハ弘法大師の撰文ふして勝道上人當山跋渉の始終を詳らふ記しとる物なり然るふ年を經るふ隨ひ碑面磨滅して文字又見へなり如寶永年中座主公辯親王再興を謀ら且之を不朽ふ傳へんと銅箱を造り其表ふ大師の全文を彫刻して石碑ふ被らしむ故ふ原文ハ見ると得ざるも其雄文顯然として靈境を盡をへし親王更ふ自ら重建の文を作りて碑陰ふ勒せり大師の文ハ性靈集と云書ふ載て所謂ハ今之を畧し唯々親王重建の文のみを左ふ錄す

重建勝道上人補陀洛山碑記

人籍靈境以進道境因勝人而彰名如補陀山亦徵哉勝道上人創窮其頂精練功成弘法大師揮天縱才文之詳矣於是世人昭々知其為名山也其文則載性靈集傳到于今而其碑則歷年遼邈掃也不存嗚呼廢而不興非人情也近者余鼎樹貞珉刋其文焉庶乎使臨者讀雄文以審靈境知靈誠為進道之緣矣然則此舉豈曰無所係乎世有高談淨心蔑視山水者不亦謬哉因題碑陰聊紀歲月云

寶永二年歲次乙酉三月

前天台座主一品公辯親王識

不断火　旧中禪寺別所よりて不断火とて開闢以来火を絶せし事なく常ふ大材を庫裏の大居爐裏ふ熏べ置り日光山内の人民ハ之を神代の火なりとて其火を乞受各々の家ふ絶さゞる様ふなし置けり故ふ當時日光市中ふ燧と云物なく若火の絶る時ハ中禪寺へ登りて火種を乞ふの土風ふてなりしと云ふ

日光八景　此八景なる物ハ大明院宮一品公辯法親王晁山名勝中鍾秀なる物と撰て新設せる所なり親王自ら陪従の徒と共ふ一絶を賦し更ふ朝鮮國使李礥ふ韻と次しむ今一々記せるを要せハ唯々元詩のミと左ふ掲く

小倉春曉　玄堂

小倉山色似皇州不嶮不夷沿水流花氣氤氳天未曙
紅霞一片八雙眸

鉢石炊煙　元龍

後負青山前抱川茅茨密櫛幾相連晴風吹盡斜陽外
唯看輕淡一抹煙

含滿驟雨　一英

古樹回巖遶曲蹊疾風甚雨眼初迷群山忽入冥雲裏
雪色翻波千尺溪

寂光瀑布　好古

寂光寺古聳青霄絶壁高懸水一條若使謫仙遊此境
廬山勝地永寥々

大谷秋月　慧海

霜月影寒大谷流猿聲山色轉閑幽騷人到此幾般意
認得洞庭千里秋

鳴蟲紅楓　高敏

霜後滿山張錦紅千尋秋色一眸中非唯碎滴朝々雨
片々又愁連夜風

山管夕照　承方

千尋崖壁隔塵踪碧水朱欄相映濃遥見長橋臥波虜
斜陽影裏是何龍

黑髮晴雪　景暉

危峰高秀絶攀緣崒嵂遠衝星斗躔正是曰為群嶽長
一朝先看白華巔

日光各地之名産

鳥類

○葱悲心鳥 當山ハ靈鳥と為て其啼聲ジヒシンと聞ゆ故ゆ名附

○雉子

○山雞

○山鳩

○駒鳥

○水兒 之と繫て他の小鳥を捕ふ

○岩燕 華嚴滝の峻谷ハ樓めり燕よりも大ふして尾ハ裂け八只尾先ハ針の如きものと見る

○鶺 足尾峠ゆて捕ふるを佳とす

○雲雀

○山雀

○小雀

○頬白

○アホヂ

○啄木鳥

○鵯

○カケス

○イカル

○小鴨 幸湖及所々の湖沼ハ樓めり

獸類

○熊

○鹿

○猪

○羚羊 皮と製して敷物となす

○狼

○猴

○狸

○貉

○貂

○栗鼠

魚類

○鱒 大谷川ゆて漁を

○山餡魚 日光東西の川ハ産を其味他魚の上ゆ出つ

○岩魚 大谷川及他の谷川ゆ産せり

○椒魚 山間の溪谷ゆ生を四趾有五指と治す

○杜父魚 大谷川ゆ尤も多し

水類

○杉

○松

○唐松

○檜

○栗

○檜

○白檜

○黒檜

○櫟

○榎

○朴

○拔

○櫟一名水松ゆ作檜ゆ類せり

○真弓 質白木理細し將棊子と作る

○椹

○部樠 質白く年を經れハ淡紅色と帯ふ挽物等ゆ用ふ

○槐 質黒し床縁等ゆよろし

○椽　質白し椀の上等品と作る

○椰躑躅　質白く年を経るハ次紅色を帯ふ茶臺木地

挽物或ハ床柱床縁等ゑ用ふ

○峯張　質薄紅ゑして堅し盆或ハ廣蓋等を作る

○瀬木　質白くして堅し膳重箱等と作るへし

○桂　質白く畧々瀬木類を用も亦同

○イラモミ　一名唐檜と云ふ檜ゑ類を曲物木釘材木等ゑ用ふ

○松　ハタ檜類を其用前ゑ同し

○リウセン　其用其質前ゑ同し

○タモ　規ゑ類を剝て箕を作り或ハ繩と為れ

○猿ナメ　質白く皮膚滑らなり床柱床縁等ゑ用ふ

○川胡桃　質軟らかして山桐ふ似と雖も皮ハ其ゑ作る

○山桑　種々の細工ゑ用ふ

○緋櫻　男躰山ゑ多し

○澤栗　質栗ゑ同し是尾山中ふ大木多し橋柱と為へし

○石楠花　四季共ゑ葉あり夏花門く其色紅色美麗なり

○躑躅　所山中到所あり

○娑羅樹　一名夏椿と云ふ

○胡鬼　秋実を結ふ其実をツクハネと称せり

○蘇方　日本元此木なし大猷廟囲内ふ只一樹有のミ葉い栢ゑ似て枝頭ゑ赤色の実を結ふ其実ハ念珠と為れへし此種ハ菩提樹と称せるものゑ天竺より傳来せる所と云へり

艸類

○日光蘭　春蘭なり

○熊谷草　花ハ紫ゑして母亦ゑ似たり

○敦盛草　花ハ濃紫ゑして形貌ゑ稍似たり此熊谷敦盛の二草と一所ゑ植ゑハ敦盛草ハ絶るを以て名附く

○雪割草　櫻草ゑ似て小なり

○岩鏡　初夏ふ花を開く其色紅なり岩間ゑ生せ

○岩千鳥　春花を開く淡紅なり深山ゑ生せ

○岩澤瀉　四季共ゑ葉の枯るなし

○岩蓮　岩菊ゑ似て小なり

○梅櫻　春花を開く櫻ふ似て殊ふ小なり

○夜叉柄杓　夏実を結ふ深山の大木の上ゑ生せ

○四輪草　盛夏ふ花を開く紅色ゑして美なり山沢ふ多く生せ

○野紫陽花　中夏ふ花を開く琉璃色なり

○一輪草　毎日一輪つゝ花を開く紐白ゑして梅花の如し

○クバ　赤沼原ゑ生ず穂を抜取て紙漉の簾を作る

○大アザミ　花の大さ四五寸

○山葡萄　皮を剝て簑を作る

○千手雁皮　千手原ゑ生ず名花也

○岩根雁皮

○白根蘭

○白根人参

○白根葵　以上三種白根山中ゑ生ず

鑛物

○小豆御影石　稲荷川の辺ネフカと云ふ

○ネフカ石　久次良村ゑ出つ寂光

○砥石　栗山郷ゑ出

○銀鑛　方今栗山郷ゑ採掘ゑ着手せり

○銅鑛　足尾郷ゑ出つ方今採掘盛なり

○御影石　所々ゑ出

○丹礬　足尾銅山より出つ

○礬石　足尾郷小名振より出つ

○紫水晶　足尾郷の内より出つ

○蠟石　上ゑ同し近年上等品稀なり

藥品

○人参　御種人参と称せ方今多く産せり

○黄連

○苦辛　和名クラヽ

○細辛

○附子

○蒼朮

○木通

○秦艽

○丹参

○草烏頭

○薄荷

○龍膽

○天目蓼

○馬勃

○柴胡

○半夏

○葛根

○鹿茸

○熊膽

食物

○岩茸　栗山郷より出

○獅子茸　生なたをシヽ茸と云ひ干せるを香茸と云ふ

○椎茸

○マイ茸

○松茸　足尾より出つ

○自然薯　トヽロイモ

○山葵　栗山郷の内より出

○百合

○婿菜　里近き山際ゑ自生せ

○山獨活　○錢葉　○水菜赤水菜青水菜の二種あり山沢中ヨ自生セ
○葱　○大根中禪寺温泉ヨリ名品トセ　○苦桃　○胡鬼子
○辛皮　○栗子　○紫蘇巻蕃椒　○栗山蕎麦
○烏醢　○平索麺　○羊羹日光羊羹ト云　○大谷海苔
○湯婆五色ユバ巻ユバ共ヨ名産ゴウ
製造品
○春慶塗　○諸漆品　○指物細工　○曲物類
○茶盆廣蓋類　○挽物類
○曲桶　○諸獸皮類　○栗山杓子　○木鉢

神橋ヨリ各地ヘ至ル里程

○東照宮七町　○二荒山神社九町　○御靈屋十一町
瀧尾社十八町半　○霧降瀧一里五町　○舍滿淵十三町
若子社一里余　○東見瀧一里二町　○清瀧村四町
○中宮祠旧中禪寺三里二町　○中禪寺温泉五里半
温泉九里　○湯殿山四里半　○細尾村二里半　○足尾村九里半
峯原六里五町　○今市驛二里　○庚申山六里十　○古
六里六里妙義山ヨリ上州花輪マテ七里ト云フ
今市驛ヨリ各地ヘ至ル里程
○宇都宮七里四町十二間余　○鹿沼五里四十四間余　○大田原

九里六七町六間　○高原峠　六里六一町五十八間

今市驛ヨリ宇都宮ヲ經テ小山ニ至ル里程　東京街道

○今市ヨリ大澤マテ　一里三十二町三十三間　○大澤ヨリ上徳

次良マテ　二里十三町十九間　○上徳次良ヨリ宇都宮マテ

二里三十町四十二間余　○宇都宮ヨリ雀宮マテ　二里六町二間　○雀宮

ヨリ石橋マテ　一里六町九間　○石橋ヨリ小金井マテ

一里六町九間　○小金井ヨリ羽川マテ　六一町一間　○羽川ヨ

リ小山マテ　一里十八町十九間

合數數十四里六五町三十六間余

今市驛ヨリ鹿沼ヲ經テ佐野ニ至ル里程

○今市ヨリ板橋マテ　一里六七町三十二間　○板橋ヨリ文挾

マテ　三十三町三十七間余　○文挾ヨリ鹿沼マテ　二里十一町六五間

○鹿沼ヨリ奈佐原マテ　一里十三町三十一間余　○奈佐原ヨリ

楡木マテ　十四町二間　○楡木ヨリ壬生飯塚ヲ經テ小山ニ至ル里數六里十三町三十七間余

○楡木ヨリ金崎マテ　一里八町五十三間　○金崎ヨリ合戰場

マテ　一里三十五町五十間　○合戰場ヨリ栃木マテ　三十三町十四

間余　○栃木ヨリ冨田マテ　六九町九間　○和泉ヨリ

マテ　一里六一町五間余　○冨田ヨリ和泉

ヨリ佐野マテ　六三町　○犬伏マテ　二里十五間

合里數十五里六七町五十七間余

今市驛ヨリ大田原ニ至ル里程陸羽街道

○今市ヨリ大渡マテ二里一町八間　○大渡ヨリ西船生マテ一里五間　○西船生ヨリ玉生マテ一里一町五十間　○玉生ヨリ幸岡マテ一里三十町丈三間半　○幸岡ヨリ矢板マテ一里十六町十一間半　○矢板ヨリ沢村マテ一里二町　○沢村ヨリ薄葉ヲ經テ大田原マテ一里六町四十七間

合里數九里丈七町十五間

今市驛ヨリ五十里ニ至ル里程會津街道

○今市ヨリ大桑マテ一里十四町四十七間　○大桑ヨリ高徳マテ丈八町五十七間　○高徳ヨリ大原マテ一里四十間　○大原ヨリ藤原マテ一里七町三間　藤原ヨリ高原マテ二里二町三十一間　高原ヨリ五十里マテ一里丈六町四間

合里數八里十二町二間

晃山勝概大尾

明治二十年三月十七日版權免許
同　年四月廿八日出版

編輯人　宮城縣平民　錦石秋
磐城國伊具郡角田東町三百六十六番地

出版人　栃木縣平民　鬼平金四郎
下野國上都賀郡日光鉢石三百五十三番地